構 造 特 記 仕 様 書　　２０２５年度版

§1 一般事項

選択項目は ⦿ 印を適用し、⦿ 印が無い場合は ※ 印を適用する。
○ 印が複数有る場合は、共に適用する。

1-1　使用材料は原則としてJIS規格適合品、JAS規格品、又は大臣認定品とする。

1-2　設計図書の優先順位は下記による。
1)本特記仕様書
2)設計図
3)標準図　⦿ 鉄筋コンクリート構造配筋標準図　⦿ 鉄骨工作標準図
• 鉄筋鉄骨コンクリート構造標準図　• 高強度せん断補強筋施工仕様書
• 鉄筋コンクリート壁式標準配筋図
4)仕様書（　•公共建築協会　※日本建築家協会 ）
5)日本建築学会標準仕様書 ，JASS5 2018年 ，JASS6 2018年

1-3　各工事に際して、施工計画書及び施工図を提出し、工事監理者の承諾を得る。

1-4　構造関係材料及び各種試験成績書・検査報告書を作成し提出する。
第三者機関による検査・試験費用は工事費に　（ ※含む　• 含まない ）

1-5　設計図書に示されていない材料、工法等を採用する場合は文書にて工事監理者の承諾を得る。

1-6　梁貫通位置、径、及び箇所数は（ •意匠図　• 構造図　※設備図 ）による。

1-7　その他

§2 構造計算ルート

2-1

方　向	構造計算ルート			
X	⦿ルート1	• ルート2	• ルート3	•
Y	⦿ルート1	• ルート2	• ルート3	•

2-2　鉄筋の継手(定着については設計図若しくは標準図による)
構造計算ルート別による主筋又は、耐力壁の鉄筋の継手の重ね長さ
※　建築基準法施行令第73条第2項による仕様規定
• 日本建築学会 JASS5(2018),鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説
• 日本建築学会 RC規準2024
XY両方向共ルート3及び限界耐力計算の場合は、令第73条第2項の仕様規定によらずJASS5(2018),
鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説及びRC規準2024とすることができる。

§3 仮設工事,土工事

3-1　山留め、根切り

3-2　埋戻し土、盛土、残土処分
埋戻し土　※ 根切り土の中の良土　• 搬入良土(埋戻し土は30cm毎に転圧締固めを行うこと)
盛土　※ 根切り土の中の良土　• 搬入良土(盛土は30cm毎に転圧締固めを行うこと)
残土処分　• 場内均均し　※ 場外搬出処分(※ 自由　• 指定場所)

§4 地業工事

4-1　基礎及びスラブ下地業　（単位mm）

場　所		捨てコンクリート厚さ 注1)	A ： 砕 石 / B ： 割栗石	厚　さ
基 礎	独立,布	※ 50 • 60 • 100	※ A • B	※ 60 • 100 • 150 •
	ベ タ	※ 50 • 60 • 100	※ A • B	※ 60 • 100 • 150 •
基 礎 梁		※ 50 • 60 • 100	※ A • B	※ 60 • 100 • 150 •
土間スラブ		※ 50 • 60 • 100	※ A • B	※ 60 • 100 • 150 •
土間コンクリート	屋内	※ 50 • 60 • 100	※ A • B	※ 60 • 100 • 150 •
	屋外	• 50 • 60 • 100	※ A • B	• 60 ※ 100 • 150 •

注1).アンカーボルト支持用フレームの、あと施工アンカーを打込む部分は100以上とする。
注2).端部aは100以上とする。

4-2　設計地耐力　長期　90 kN/m²　短期　135 kN/m²　終局　kN/m²
地耐力載荷試験　• 行う（　箇所,長期設計耐力の3倍を確認する)　※ 行わない

4-3　地盤改良
• 無筋コンクリート地業　• 締固め工法　⦿ 柱状改良
• セメント系固化材撹拌　• 圧密排水工法　•
[• 載荷試験　• 一軸圧縮試験]　• 行う（　箇所)　※ 行わない
[• 六価クロム溶出試験　]　• 行う　※ 行わない

4-4　既製コンクリート杭、鋼管杭、その他特殊杭
1)杭種
• PHC杭　• A種　• B種　• C種　•
• ST杭　• A種　• B種　• C種　•
• SC杭　t mm　•　•　•　•
• PRC杭　• I 種　• II 種　• III種　• IV種
• 節杭　• A種　• B種　• C種　•
• 鋼管杭
2)工法
• 打撃工法　• 油圧ハンマー　• ディーゼルハンマー
• 埋込み工法　• プレボーリングセメントミルク注入工法
• プレボーリング拡大根固め工法(認定工法)
杭周固定液　※ あり　• なし
• 中掘拡大根固め工法(認定工法)
• 回転埋設根固め工法(認定工法)
• 回転杭工法
先行掘削　※ あり　• なし

3)杭径,設計耐力,本数表

杭径(拡底部)mm	長期kN	短期kN	終局kN	本数	備　考
(　　)					
(　　)					
(　　)					
(　　)					

4)杭の構成は設計図による。
5)杭頭補強
• かご筋　• スタッド溶接　• 杭外周溶接

4-5　場所打鉄筋コンクリート杭,場所打鋼管コンクリート杭
1)工法
• アースドリル工法　• 拡底アースドリル工法
• リバース工法　• オールケーシング工法　（ • ベノト工法 •　　）
• BH工法　•
2)杭径,設計耐力,本数表(拡底部は施工径を示す)

杭径(拡底部)mm	管厚 mm	長期kN	短期kN	終局kN	本数	備　考
(　　)						
(　　)						
(　　)						
(　　)						
(　　)						

3)杭先端深さ　• GL-　m　• 杭リストによる　• 杭伏図による
4)孔壁測定　（ 2 方向)
※ 行う　（ • 全数　•　% ）　• 行わない
5)使用材料　コンクリートの仕様は設計図による。特記のない場合JASS5水中コンクリートによる。
コンクリート　Fc　（ • 普通ポルトランドセメント　• 高炉セメント B種　）
鉄筋　• D　以下　SD295　• D　以上　SD345
• D　以上　SD390
鋼管(リブ付)　• SKK400　• SKK490

4-6　杭打地業共通事項
1)[• 試験杭　• 試験掘]　• 行う（　本）　• 行わない
2)載荷試験　• 行う（　箇所,長期設計耐力の3倍を確認する)　※ 行わない
3)SL塗布　• 行う　※ 行わない

§5 鉄筋工事

5-1　材種

種 類	径		継　手
⦿ SD295	D16　以下		※ 重ね継手　• スパイラル　• 工場溶接
⦿ SD345	D19　以上		• 重ね継手　※ ガス圧接　• 溶接継手
• SD390	D　以上		※ ガス圧接　• 溶接継手　• 機械継手(　級)
• SD490	D　以上		• ガス圧接　※ 溶接継手　• 機械継手(　級)
• 溶接金網			• 重ね継手
• 高強度せん断補強筋	• 1275級	P	•フック加工　• スパイラル　• 工場溶接
	• 785級	K	
	• 685級	U	

5-2　ガス圧接部の検査(第三者機関による)外観検査全数(引張り試験の場合、施工者自主検査でもよい)
⦿ 抜取り検査
⦿ 引張り試験(JIS Z3120)
1検査ロットにつき　※ 3本　• 原則 柱・梁の径毎に3本
• 超音波探傷試験(JIS Z3062)　• 熱間押抜き試験
1検査ロットにつき　• 30箇所　•
○ 不合格となった圧接部は切り取って再圧接を行う。また残り全数に対して超音波探傷試験を行う。
1検査ロットは1組の作業班が1日に施工した圧接箇所の数量で200箇所以内

5-3　溶接、機械式継手の検査は各々の認定方法による他,日本継手協会仕様書(2017年)及び下記を参照する。
JIS Z 3063 (鉄筋コンクリート用異形棒鋼溶接部の超音波探傷試験方法及び判定基準)
JIS Z 3064 (鉄筋コンクリート用機械式継手の鉄筋挿入長さの超音波測定試験方法及び判定基準)

5-4　梁貫通補強
補強筋は原則として工場製品(評定品)を使用する。

5-5　その他
基礎梁、基礎小梁の継手及び定着は原則として　⦿ ①一般　⦿ ②地反力を受ける（布基礎部)
• ③上載荷重が大きい場合　とする。
梁の余長 ℓ_d の採用　大梁・小梁　※ D'（梁有効成)　• 端部上下筋15d　中央上下筋20d
基礎梁　※ min(D',Lₓ)　• 端部上下筋15d　中央上下筋20d
鉄筋の組立は適切な位置にスペーサーを使用し、組立後は形状保持のための養生を行う。
コンクリートを2回打する部材は、初回の打設後に鉄筋の清掃を行う。
コンクリート打設前に工事監理者の検査を受け不備な箇所は修正を行う。

§6 コンクリート工事

6-1　レディーミクストコンクリート(JIS A5308-2024)
1)セメント　※　普通ﾎﾟﾙﾄﾗﾝﾄﾞｾﾒﾝﾄJIS R5210　• 高炉ｾﾒﾝﾄB種
• 低熱ﾎﾟﾙﾄﾗﾝﾄﾞｾﾒﾝﾄJIS R5210　•
2)粗骨材　• 砂利　※ 砕石　• 高炉ｽﾗｸﾞ骨材　•人工軽量骨材　• 再生骨材
最大径(mm)　※ 20　• 25　• 40
3)設計基準強度　(N/mm ²)　(使用区分は設計図の軸組図に示す)
⦿ 普通コンクリート
• Fc18　• Fc21　⦿ Fc24　• Fc27　• Fc30　• Fc　• Fc
• 軽量コンクリート(※　1種　• 2種　気乾単位容積質量　※ 18.5　•　　)
• LFc18　• LFc21　• LFc24　• LFc27　• LFc30　• LFc
4)土間コンクリート　⦿ Fc18　（ただし柱,壁等と同時に打込む場合は躯体の強度とする)
5)捨てコンクリート　⦿ Fc18
6)防水押さえコンクリート　• Fc　• LFc　(気乾単位容積質量　※ 18.5 •　　)
7)かさ上げコンクリート　• Fc　• LFc　(気乾単位容積質量　※ 18.5 •　　)

6-2　混和材　※AE減水剤　• 高性能AE減水剤　• 躯体防水材　• 膨張材
注1).混和剤は所定の品質を確保するためにプラントの特性に応じたもの使用する。

6-3

箇　所	基礎, 基礎梁	一　般			備　考
スランプ　cm	15	18			
水セメント比　%	60	60			60以下
単位水量　kg/m³	185	185			185以下
単位セメント量　kg/m³	330	270			270以上

注2).スランプは特記なき限り施工者が決め監理者に報告する。

6-4　試験（躯体コンクリートの28日圧縮試験は公的機関において行う)
1)骨材　[• 塩分含有量　• アルカリシリカ反応性]　※ 行う　• 行わない
2)フレッシュコンクリート　[• スランプ　• 空気量]　※ 行う　• 行わない
3)躯体のせき板取り外し時期決定圧縮試験　※ 行う　• 行わない
4)コンクリートコア抜き取り圧縮試験　• 行う　※ 行わない
5)マスコンクリートのひび割れ照査(温度応力解析)　• 行う　※ 行わない
6)単位水量測定　• 行う　• 行わない

6-5　調合（補正値は工事費に含む)
計画供用期間の級( )は耐久設計基準強度Fd
• 短期(18)　⦿ 標準(24)　• 長期(30)　• 超長期(36)
調合管理強度　Fm=Max(Fc,Fd)+S　S＝3～6
材齢28日の調合強度Fは下記の両式を満足するものとする。
F≧Fm+1.73σ　F≧0.85Fm+3σ

6-6　せき板及び支柱の在置期間(普通ポルトランドセメントの場合)

		基礎、梁側、柱、壁	スラブ下	梁　下
コンクリートの材齢による場合	15 ℃以上	3 日	17 日	28 日
	5 ℃以上	5 日	25 日	
	0 ℃以上	8 日	28 日	
圧縮試験による場合		5N/mm²	注)0.85Fcまたは12N/mm²	注）設計基準強度

注）かつ、施工中の荷重及び外力について、構造計算により安全が確認されるまで。

6-7　住宅性能表示　劣化等級　• 等級2　• 等級3
劣化等級2又は3を指定する場合は、鉄筋コンクリート構造配筋標準図(1)2-7かぶり厚さ
が変わる為,かぶりを訂正又は,設計図に明示する

6-8　Fc36を超える場合は高強度コンクリートとし、仕様は別記特記仕様書(JASS5等)による

§7 鉄骨工事

7-1　材種及び使用箇所

規 格 名 称	鋼　材　名	柱	通し ダイア	内 ダイア	大梁	ﾌﾞﾚｰｽ	小梁他
一般構造用圧延鋼材	⦿ SS400　•				○		○
溶接構造用圧延鋼材	• SM400A　• SM490A						
建築構造用圧延鋼材	• SN400A　•						
	• SN400B　• SN490B						
	⦿ SN400C　• SN490C		○				
一般構造用角形鋼管	• STKR400　• STKR490						
冷間成形角形鋼管	• BCR295　•						
	• BCP235　• BCP325						
熱間成形角形鋼管	• SHC400B　• SHC400C						
	• SHC490B　• SHC490C						
一般構造用炭素鋼管	⦿ STK400　• STK490	○					
	• STKN400　• STKN490						
一般構造用軽量形鋼	• SSC400　•						
建築構造用圧延棒鋼	• SNR400						

7-2　高力ボルト

高 力 ボ ル ト の 種 類		使 用 箇 所
トルシア形高力ボルト	※　S10T	全般
JIS形高力ボルト	• F10T	トルシア形が使用できない部分
溶融亜鉛メッキ高力ボルト	• F8T	母材が亜鉛メッキされている部分
超高力ボルト	• S14T	屋内環境

7-3　普通ボルト,アンカーボルト
1)材質　⦿ SS400　• SS490(M　以上)
• ABR400　• ABR490　• ABM400　• ABM490(ABMはM24以上)
2)大臣認定柱脚(メーカー仕様による)　• 使用する　⦿ 使用しない

7-4　頭付きスタッド

径	長　さ(mm)	使 用 箇 所
16 φ	• 80　• 100　• 120　• 150　•	
19 φ	• 80　• 100　• 120　• 150　•	
22 φ	• 100　• 120　• 150　•　•	

7-5　溶接材料
1)アーク溶接に使用する溶接棒,ワイヤ及びフラックスは母材の種類,寸法,及び溶接条件に相応したものを選定する。
2)ガスシールドアーク溶接に使用するシールドガスは溶接に相応したものとする。

7-6　スカラップ形状　※　ノンスカラップ工法　• スカラップ工法

7-7　継手

	柱		梁	
フランジ	• 高力ボルト	• 現場溶接	※　高力ボルト	• 現場溶接
ウェブ	• 高力ボルト	• 現場溶接	※　高力ボルト	• 現場溶接

7-8　溶接手法及び管理
1)　使用する溶接ワイヤー、入熱量及びパス間温度等の仕様については鉄建協又は全構協の仕様で、専任の溶接施工管理技術者により管理を行うこと。
2)　完全溶け込み溶接はAW検定の有資格者が行うとする指定を　• 行う　• 行わない
3)　本工事で代替タブを使用する場合は、代替タブ溶接技術者技量検定付加試験を　• 行う　• 行わない
但し、代替タブのAW検定有資格者は技量検定付加試験を免除する。

7-9　デッキプレート　（単位　mm ）
1)　床用　高さ　•　板厚　•
2)　合成スラブ用　高さ　•　板厚　•
3)　型枠用　高さ　•　板厚　•　形版　タイプ
4)　防錆処理　• プライマー　• 亜鉛メッキ　• Z12　• Z27

7-10　塗装(工場塗 ※ 2回　• 1回、現場タッチアップ程度とする)
1)　素地調整　※ ケレン　• ブラスト
2)　下塗り用塗料

適用 屋外	適用 室内	塗　料		種　別		標準膜厚
	※	鉛、クロムフリ-錆び止め	JIS K5674	※ 1種	※ 2種	30μm
	•	水系さび止めペイント	JAS18　M-111			30μm
•		変性エポキシ樹脂プライマー	JAS18　M-109	• 1種	• 2種	40μm
•		有機ジンクリッチプライマー	JIS K5552		• 2種	15μm
•		構造物用さび止めペイント	JIS K5551	A種		30μm

3)　溶融亜鉛メッキ　⦿ 行う　• 行わない
4)　常温亜鉛メッキ　• 行う　• 行わない
5)　高耐食メッキ鋼板（t3.2mm以下）　• 用いる　• 用いない

7-11　溶接部の検査(受入検査)　※　行う　• 行わない
1)受入検査を行う第三者検査機関は、建築主、設計者、工事監理者又は工事施工者(元請)との直接契約による。
2)第三者検査機関は(一社)日本溶接協会によるCIW検査事業者認定種別における超音波探傷検査部門の認定を取得した事業者と、当該工事の鉄骨製作工場の社内検査を行っていない事業者とする。
3)受入検査は目視による外観検査と超音波探傷検査とし、社内検査完了後に行う。
4)外観検査の合否判定は国土交通省告示1464号による。ただし告示に定めのないものは日本建築学会「JASS6 鉄骨工事 2018 付則6. 鉄骨精度検査基準」の限界許容差による。
5)超音波探傷検査は日本建築学会「鋼構造建築溶接部の超音波探傷検査規準・同解説」2018により、合否判定は7.2.1疲労を考慮しない溶接部のうち、引張応力が作用する溶接部の項を適用する。
6)溶接箇所数の数え方は「JASS6 鉄骨工事 2018」表10.1溶接箇所数の数え方による。
7)受入検査の抜取り方法及び抜取り率は以下による。
a)工場溶接の場合
i .検査ロットは各節、各工区毎に溶接箇所300箇所以内で構成する。
ii .抜取り数は各ロット毎に30箇所をランダムにサンプリングする。
iii .大きさ30個のサンプル中の不適合個数が1個以下のときはロットを合格とし、4個以上のときはロットを不合格とする。ただし、サンプル中の不適合数が1個を超え4個未満のときは、同じロットからさらに30個のサンプルを抜取検査する。総計60個のサンプルについての不適合個数の合計が4個以下のときはロットを合格とし、5個以上のときはロットを不合格とする。
b)現場溶接の場合
i .全数検査とする。
8)検査により不合格と判定された溶接部はすべて補修を行い、再検査して合格とならねばならない。
9)ずれ・食違いの補修方法は、独立行政法人 建築研究所監修「突き合せ継手の食い違い仕口のずれの検査・補強マニュアル」による。

7-12　鉄骨製作工場　下記○印のグレード認定工場の内、納期・製作能力・鉄骨数量を勘案して工場選択のこと

国土交通省大臣認定(グレード)					
S	H	ⓂⓌ	R	J	

§8 コンクリートブロック・ALCパネル・押出成形セメント板・PCa板工事

8-1　コンクリートブロック
1)種類　• A 種　• B 種　• C 種
2)厚さ mm　• 100　• 120　• 150　• 190

8-2　ALC　パネル
1)使用箇所　• 床　• 屋根　• 外壁　• 内壁
2)厚さ mm　• 75 (80)　• 100　• 120(125)　• 150　• 175
3)外壁取り付け構法

方　向	構　法	使 用 箇 所	備　考
縦	• ロッキング構法		
横	• アンカー構法		

8-3　押出成形セメント板
外壁取付構法及び厚さ mm　•　•

方　向	構　法	使 用 箇 所	備　考
縦	• ロッキング構法		
横	• スライド構法		

8-4　PCa板
1)床及び屋根　• 床　• 屋根
• PCa板単独 厚さ mm　•　•
• 合成板

PCa板厚さ mm	現場打厚さ mm	合計厚さ mm	備　考

2)外壁 厚さ mm　•　•

2025年2月1日作成　（不許複製)

工　事　名	天ケ瀬ダムかわまちづくり広場等整備工事（休憩施設等）	No. S-01
図　面　名	構造特記仕様書	令和7年度
宇 治 市 役 所 建 設 部 施 設 建 築 課		

鉄筋コンクリート構造配筋標準図（１）　２０２５年度版

§１　一般事項

1－1　基本事項

1．使用材料、工法等は構造特記仕様書による。
2．設計図書に記載なき場合は本標準図に従うものとする。
　また本標準図に明記なき場合は構造特記仕様書１－２－４に指定した共通仕様書及び日本建築学会「JASS5(2018)」及び「鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説(2021)」による。
3．本標準図は異形鉄筋を対象とし、dは呼び名に用いた数値とする。

1－2　その他

4．本標準図に示す単位は特記なき限りすべてmmとする。

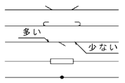
§２　共通事項

2－1　鉄筋の表示記号

鉄筋の表示記号及び最外径は下表による。

記号	•	×	∅	●	○	⊙	⊠	◎	⊕	◆	※
呼び径 d	D10	D13	D16	D19	D22	D25	D29	D32	D35	D38	D41
最外径 D	11	14	18	22	26	29	33	37	40	43	47

○ フックのない場合
○ フックのある場合
○ 本数に差がある場合
○ 機械式継手表示
○ ガス圧接、溶接継手表示



2－2　鉄筋の折り曲げ

柱・梁・基礎の主筋、及び、その他の鉄筋の折曲げ形状・寸法

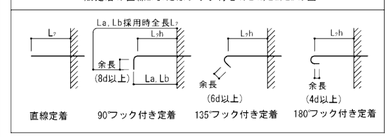
折曲げ角度	図	鉄筋の使用箇所による呼称	鉄筋の種類	鉄筋の径による区分	鉄筋の折曲げ内法直径 (D)
180°	余長 4d 以上	柱・梁主筋 基礎主筋 壁筋 あばら筋 スパイラル筋 スラブ筋 壁筋	SD295	D16以下	3d以上
			SD345	D19～D41	4d以上
135°	余長 6d 以上		SD390	D41以下	5d以上
90°	余長 8d 以上		SD490	D25以下	5d以上
	(SD490は90°のみ)			D29～D41	6d以上

2－3　鉄筋の定着及び重ね継手の長さ

「JASS5(2018)」に準拠

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 (N/mm²)	重ね継手の長さ	定着の長さ 一般	定着の長さ 小梁・床スラブ 上端筋	定着の長さ 小梁・床スラブ 下端筋
			上段 重ね L₁ / 下段 フック付き L₁h	上段 重ね L₂ / 下段 フック付き L₂h, La	フック付き Lb	L₃, L₃h
SD295 SD345 ()はSD345を示す	18	45d(50d) 35d	40d 30d, 20d	15d (20d)	L₃=20d L₃h=10d 床スラブの場合 L₃=10d かつ 150 以上 片持ちスラブ片持ち梁の場合 L₃=25d SD490は適用外
	21	40d(45d) 30d	35d 25d, 15d(20d)		
	24～27	35d(40d) 25d(30d)	30d(35d) 20d(25d), 15d(20d)	15d	
	30～36	35d 25d	30d 20d, 15d		
	39～45	30d(35d) 20d(25d)	25d(30d) 15d(20d), 15d		
	48～60	30d 20d	25d 15d, 15d		
SD390 (SD490) (-)は適用外	21	50d(-) 35d(-)	40d(-) 30d(-), 20d(-)	20d (-)	
	24～27	45d(55d) 35d(40d)	40d(45d) 30d(35d), 20d(25d)	15d (-)	
	30～36	40d(50d) 30d(35d)	35d(40d) 25d(30d), 20d(25d)		
	39～45	40d(45d) 30d(35d)	35d(40d) 25d(30d), 15d(20d)		
	48～60	35d(40d) 25d(30d)	30d(35d) 20d(25d), 15d(20d)		

一般定着の直線L₂またはフック付きのL₂h, La, Lbの図

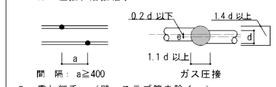


1．重ね継手の長さは鉄筋の折曲げ起点間の距離、又、フック付きのL₂h は仕口面から鉄筋の折曲げ起点までとし、末端のフックは定着長さに含まない。
2．軽量コンクリートを使用する場合は、2-3の数値に5ｄを加算する。
3．構造特記仕様書2-2で令第73条を選択した場合、主筋又は耐力壁の鉄筋の継手重ね長さは左下表L1かつ40ｄ(軽量コンクリートを使用する場合は50ｄ)とする。
4．構造特記仕様書2-2でJASS5(2018)、RC規準2024とした場合、主筋又は、耐力壁の鉄筋の継手重ね長さは設計図によるが、参考値として左下表JASS5(2018)にL₁, L₂を示す。

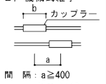
2－4　継手一般

ガス圧接継手・溶接継手・機械式継手に関する事項は、構準仕様書および施工要領ならびに鉄筋継手工事特記仕様書(2019年版)共に公益社団法人日本鉄筋継手協会編に準拠。

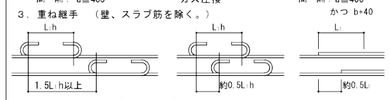
1．ガス圧接、溶接継手



2．機械式継手



3．重ね継手　（壁、スラブ筋を除く。）



4．D35以上の鉄筋は原則として重ね継手は用いない。
　（ガス圧接、溶接、機械式継手等による）
5．溶接継手及び機械式継手の場合はメーカー仕様による。

2－5　鉄筋のフック

○ 下記の１．～７．に示す鉄筋の末端部にはフックをつける。
1．あばら筋及び帯筋　　2．煙突の鉄筋
3．柱及び梁（基礎梁を除く）の出隅部分の鉄筋（下図参照）

上図の⊗印の鉄筋の重ね継手末端にはフックが必要。

4．片持ちスラブの上端筋の先端
5．最上階及びこれに準ずる階所の柱頭の四隅の鉄筋
6．杭基礎の基礎筋（偏心基礎及び杭２本打以上の場合）
7．鉄骨柱の脚部の基礎柱の四隅、又は根巻コンクリートの四隅の鉄筋

2－6　鉄筋のあき

○ 鉄筋のあきａは原則として下記による。
　呼び名の数値dの　1.5 倍以上
　粗骨材の最大寸法の 1.25 倍以上　かつ 25 以上

※Dは最外径を示す

○ 鉄筋径が異なる場合は大きい方による。
○ 二段筋のあきは1.5d且つ粗骨材最大値の1.25倍以上とする。

2－7　かぶり厚さ

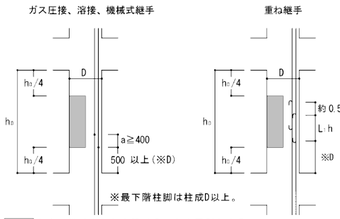
鉄筋に対するコンクリートの設計かぶり厚さと最小かぶり厚さ

部位			かぶり厚さ 仕上げあり	かぶり厚さ 仕上げなし
土に接しない部分	屋根スラブ 床スラブ 非耐力壁	屋内	30(20)	30(20)
		屋外	30(20)	40(30)
	柱 梁 耐力壁	屋内	40(30)	40(30)
		屋外	40(30)	50(40)
	擁壁		※1 50 (40)	※1 50 (40)
土に接する部分	柱・梁・床スラブ・壁 布基礎の立上り		※2 50 (40)	
	基礎・擁壁		※2 70 (60)	

1．( )　内の数値は最小かぶり厚さを示す。
2．仕上げあり　とは、鉄筋の耐久性上有効な仕上げがある場合とする。
3．※1　品質・施工法に応じ、工事監理者の承認で10減の値とすることができる。
4．※2　軽量コンクリートの場合は、これに10加算する。
5．柱・梁の主筋の最小かぶり厚さは、表の数値以上かつ主筋径の1.5倍以上とする。

§３　柱

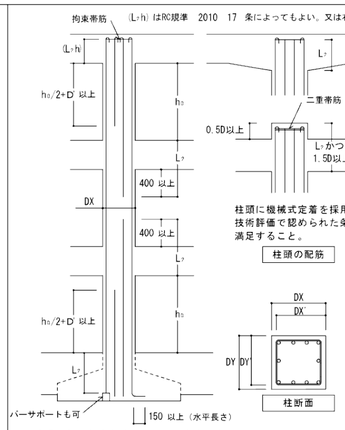
3－1　主筋の継手



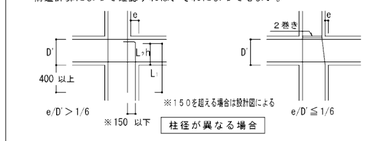
※最下階柱脚は柱径D以上。

○ 印内に継手中心部を設けることを原則とする。
　設計者判断により、認定を取得した工法ではa=0とできる。

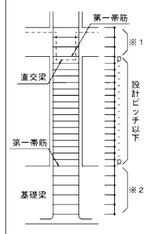
3－2　主筋の定着



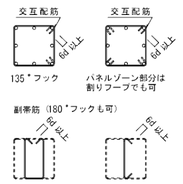
※ 余長 D' は柱有効成（DX' DY' の大きい方）とし、構造計算によって確認すれば、それによってもよい。



3－3　帯筋　副帯筋

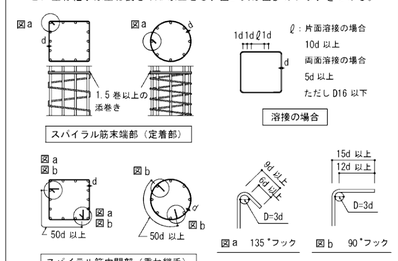


○ 第一帯筋（D13 以上使用の事）は梁上端筋直上に入れ、その間を設計ピッチ以下に割り付ける。
○ 帯筋の加工は下図による。

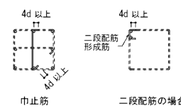


○ パネルゾーンの帯筋は設計図によるが、明記なき場合は下記による。ただし、帯筋量(pw)は0.2%以上とする。
※1．設計ピッチの 1.5 倍以下とする。⊟ 形以上の場合は同径同材質で □ 形φ100以下とする。
※2．基礎梁部分は、同径で □ 形φ150以下とする。

○ スパイラル筋の末端処理及び継手は下記のとおりとする。
1．末端は 1.5 巻以上の添巻きとし、図a のフックをつける。
2．重ね継手は重ね長さ 50d 以上とし、図a 又は図b のフックをつける。



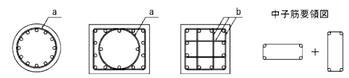
3－4　補助筋



○ 補助筋は D10 をピッチ 600 以内に割り付ける。
○ 巾止筋を設ける場合は、設計者の指示による。

3－5　柱のコンファインド補強

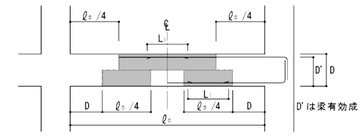
補強する柱は設計図による。（柱頭、柱脚柱成の範囲を補強する。）



a スパイラル帯筋 φ60～75　（有効間隔 50 程度）
b 溶接閉鎖型帯筋 φ60～75　（有効間隔 50 程度）

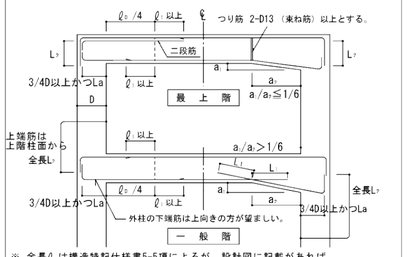
§４　梁

4－1　主筋の継手



○ 印内に継手中心部を設けることを原則とする。（告示平 12 第 1463 号使用基準参照）溶接継手の場合でも柱面より 500 以上はなすこと。
○ 定着形状を下記以外とする場合は設計図書による。

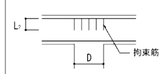
4－2　主筋の定着及び余長



外柱

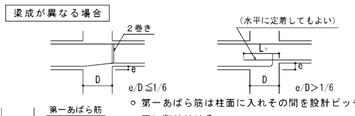
※ 余長ℓ₁は構造特記仕様書5-5項によるが、設計図に記載があれば、設計図を優先する。

中柱

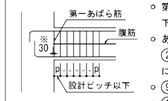


○ 梁主筋は原則として通し筋とするが、拘束筋 ⊓ をあばら筋と同程同ピッチで落とし込む。

梁成が異なる場合

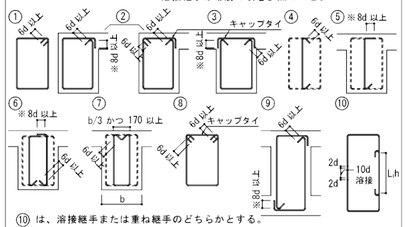


4－3　あばら筋　副あばら筋



※ ねじれ応力を受ける腹筋は定着長さL₂とする。

○ 第一あばら筋は柱面に入れその間を設計ピッチ以下に割り付ける。
○ あばら筋の加工は下図①又は⑧による。
　②③⑤⑥⑨は同時打込みのスラブ付の場合に限る。
○ ⑨⑩は梁成の大きい場合。
○ ①はピッチ 2p で交互配置とする。
○ 135°フックは 180°フックでも可とする。
○ 溶接継手は帯筋の項を参照のこと。



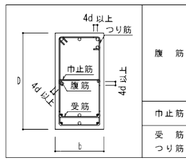
⑩ は、溶接継手または重ね継手のどちらかとする。
※ 柱面より梁成の範囲は、180° フック又は 135°フックが望ましい。

（販売元）一般社団法人日本建築構造設計事務所協会連合会　http://fasa-net.jp　（発行元）一般社団法人関西建築構造設計事務所協会　TEL(06)6763-8205　FAX(06)6763-8206　http://www.kse-web.com/　2025年2月1日作成
（不許複製）

工事名	天ケ瀬ダムかわまちづくり広場等整備工事（休憩施設等）	No. S-02
図面名	鉄筋コンクリート造配筋標準図（１）	令和7年度
宇治市役所建設部施設建築課		

鉄筋コンクリート構造配筋標準図（２）　２０２５年度版

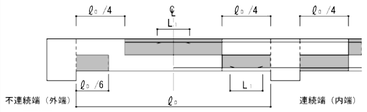
4－4 補助筋



腹筋	D＜ 600　不要
	600 ≦ D＜ 900　2-D10　（１段）
	900 ≦ D＜1200　4-D10　（２段）
	1200 ≦ D　D10 @300 以内
巾止筋	D10 @1000 以内で割り付ける。
受筋つり筋	D10 @1000 以内で割り付ける。

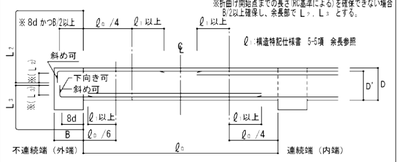
4－5 小梁及び片持梁

a) 小梁継手



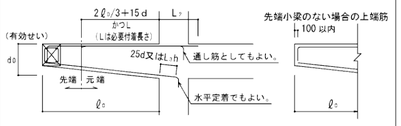
○ ▒ 印内に継手中心部を設けること。ただし溶接継手の場合は梁面より 500 以上はなすこと。

定着



b) 片持梁定着継手

○ 下端筋は水平定着でも可。上端筋には継手を設けてはならない。



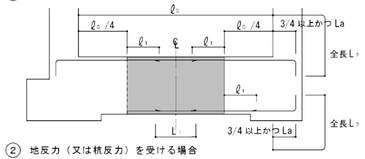
4－6 基礎梁及び基礎小梁

※　地反力を受ける梁は構造特記仕様書5-5項および設計図に示す。

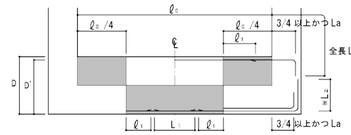
余長ℓ1は設計図に記載があれば、設計図を優先する。

a) 基礎梁の継手及び定着

① 一般（独立基礎、杭打独立基礎）



② 地反力（又は杭反力）を受ける場合



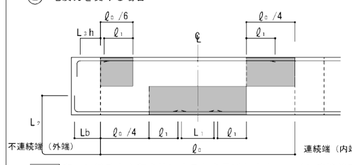
※ 設計者の判断による。

③ 上載荷重が大きい場合は②の主筋継手位置を上下逆にする。

b) 基礎小梁の継手及び定着

① 地反力を受けない場合は (4-5) による。

② 地反力を受ける場合

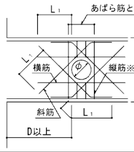


○ ▒ 印内に継手中心部を設けることを原則とする。ただし溶接継手の場合は柱面（基礎小梁の場合は梁面）より 500 以上はなすこと。Lb とれない場合 4-5ａ定着によってよい。

4－7 梁の貫通補強

1．補強筋は原則として工場製品（認定品）を使用する。

2．認定品を使用しない場合は下図によるが、補強筋は設計図による。



○ 梁貫通孔は梁成の 1/3 以下とする。

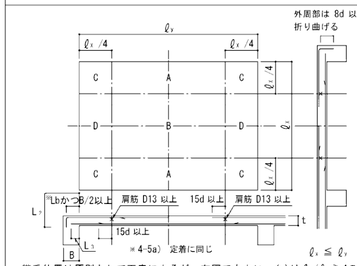
○ 孔が複数の場合は中心間隔を径（φ）の 3倍以上とする。
また位置は原則として柱面から梁成 D 以上はなし、梁成の中央 D/2 の範囲内とする。

○ φが 100mm未満、かつ D/10以下の場合は補強を省略することができるが、孔際の両側にかぶり厚さを確保してあばら筋を追加する。

○ ※縦筋はあばら筋加工とする。

§５　スラブ

5－1 鉄筋の折り曲げ及び定着

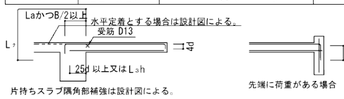


5－2 継手

継手位置は原則として下表によるが、右図でもよい。（ ）は ℓy/ℓx ≧4の長辺方向

		標準継手位置	
上端筋	短辺方向	B	D
	長辺方向	A	B
下端筋	短辺・長辺方向	A　(B) C	D

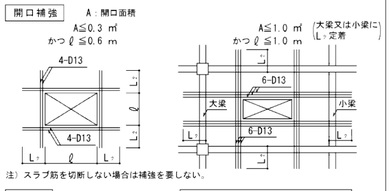
5－3 片持ちスラブ



片持ちスラブ隅角部補強は設計図による。

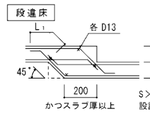
5－4 補強筋

開口補強　A：開口面積



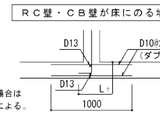
注）スラブ筋を切断しない場合は補強を要しない。

段違床

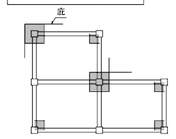


S>t の場合は設計図による。

ＲＣ壁・ＣＢ壁が床にのる場合

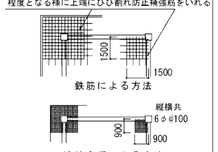


セットバックを含む屋根屋上スラブ隅角補強



補強範囲

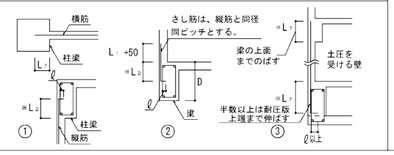
スラブ筋と同径で 1/2 ピッチ以下（≒@100）程度となる様に上端にひび割れ防止補強筋をいれる



鉄筋による方法　　溶接金網による方法

§６　壁

6－1 定着及び継手



6－2 壁配筋

○ 定着長さはL1、及び継手長さはL2とする。

※ただし耐震壁で帯筋、あばら筋の内側に定着できない場合は、ℓ=8d かつ 150 以上 45°～ 90°折り曲げ、定着長さはL2かつ D/2 以上とする。

（通し配筋の場合は不要）

○ 土圧を受ける壁の外側鉄筋の定着は③図による。

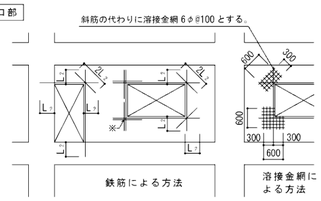
○ 継手位置はこの部分でもよいが、土圧を受ける壁は 5-2 項の土圧面側を上端筋側に読み替える。

壁の配筋は設計図書による。

○ ダブル配筋では巾止筋を縦横共 D10@1000 以内を標準とする。

6－3 補強筋

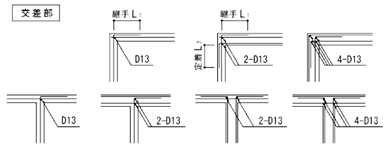
開口部



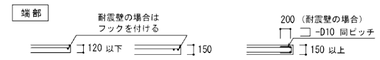
○※ 斜筋を縦・横補強筋でおきかえる場合は設計図による。

○ 斜筋は内側に配置する。壁筋を切断しない場合は補強を要しない。

交差部

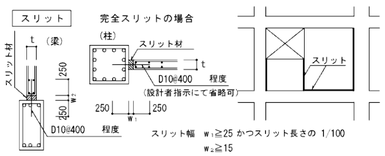


端部



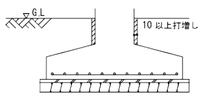
○ 開口補強筋はリストによる

スリット



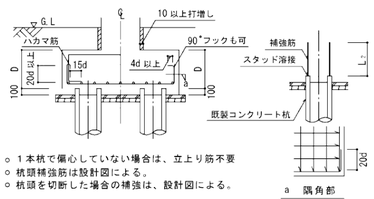
§７　基礎

7－1 独立基礎



ただしかぶり厚さ 50（軽量コンクリートの場合 60）の場合は不要

7－2 杭基礎



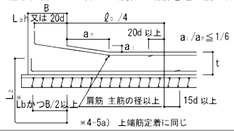
○ １本杭で偏心していない場合は、立上り筋不要

○ 杭頭補強筋は設計図による。

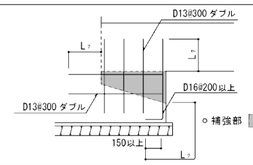
○ 杭頭を切断した場合の補強は、設計図による。

7－3 べた基礎継手及び定着

継手位置は 5-2 項の上端筋、下端筋を逆に読み替える。



7－4 基礎と基礎梁

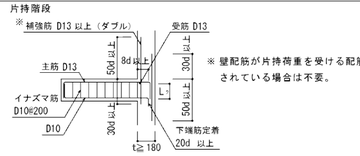


○ 補強部 ▒ の厚さは梁巾とする。

§８　その他

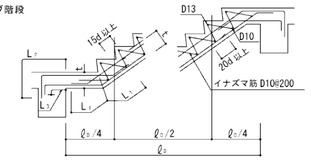
8－1 階段

片持階段

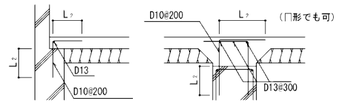


※ 壁配筋が片持荷重を受ける配筋とされている場合は不要。

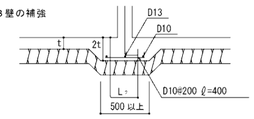
スラブ階段



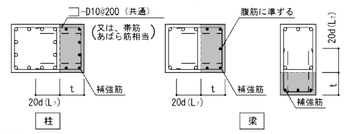
8－2 土間コンクリート



ＲＣ壁・ＣＢ壁の補強



8－3 打増し補強



○ ▒ は打増し部分を示す。－ － －と配筋してもよい。

○ 補強筋 定着は 20d(L1)（ ）は、主要な耐力壁等が取付く場合で設計図による。

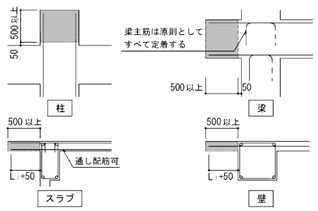
t＜ 70 補強なし　　70≦t≦100 D13@300

100＜t≦200 D16@300　　200＜t≦300 D16@200

t＞300 設計図による

原則として、構造図に記載された個所以外に打増ししてならない。

8－4 増築予定



○ ▒ は、はつり部分を示す。

○ 増築時の継手は、原則として柱・梁の主筋は溶接継手する。

（増築側の鉄筋は水平定着でもよい。）

（販売元）一般社団法人日本建築構造設計事務所協会連合会　http://fasa-net.jp　（発行元）一般社団法人関西建築構造設計事務所協会　TEL(06)6763-8205　FAX(06)6763-8206　http：／／www. kse-web. com／　2025年2月1日作成
（不許複製）

工事名	天ケ瀬ダムかわまちづくり広場等整備工事（休憩施設等）	No. S-03
図面名	鉄筋コンクリート造配筋標準図（２）	令和7年度
宇治市役所建設部施設建築課		

鉄 骨 工 作 標 準 図 (1) 2025年度版

§1 一般事項

1－1 基本事項

1) 使用材料、工法等は構造特記仕様書による。
2) 設計図書に記載なき場合は本標準図に従うものとする。また本標準図に明記なき場合は、構造特記仕様書１－２－４．５に指定した共通仕様書および標準仕様書による。
3) 製作精度等に関しては、ＪＡＳＳ６の付則６「鉄骨精度検査基準」による。
4) 本標準図に示す単位は特記なき限りすべてmmとする。

1－2 その他

§2 共通事項

2－1 略号

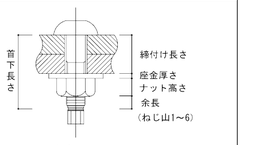
○ AB	アンカーボルト	○ BH	組立てＨ形鋼
○ BPL	ベースプレート	○ CHPL	チェッカープレート
○ DFPL	ダイアフラム	○ FB	フラットバー
○ FPL	フランジプレート	○ GPL	ガセットプレート
○ HTB	高力ボルト	○ RPL	リブプレート
○ SPL	スプライスプレート	○ TB	ターンバックル
○ WPL	ウェブプレート	○ $W_{1\sim9}$	溶接記号（§4 参照）

§3 ボルト接合

3－1 高力ボルト

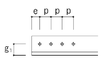
ボルトの長さ

ねじの呼び	締付け長さに加える長さ	
	F8T, F10T	S10T
M16	30	25
M20	35	30
M22	40	35
M24	45	40



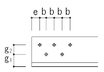
1. 特記以外はすべてS10T（トルシア形高力ボルト、上図）又はF10Tとする。
2. 本締めに使用するボルトと、仮締めボルトの兼用はしてはならない。
3. ボルトの接合面の処理は、締付け摩擦面を平グラインダ掛け等を行い、黒皮を除去して一様に赤さびを自然発生させる。ただし、ショットブラスト等を行った場合はこの限りでない。締付けは１次締付け後、マーキングを入れてから本締めをする。
4. 亜鉛メッキボルトの場合は、すべてF8Tとする。

3－2 高力ボルトのピッチ



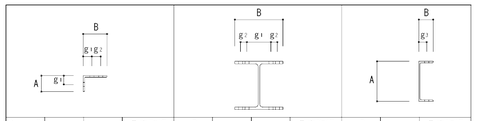
呼び径			M16	M20	M22	M24
孔径			18	22	24	26
ピッチ	標準	P	60	60	60	70
	最小		40	50	55	60
はしあき		e	40	40(50)	40(55)	45(60)
最小縁端距離	さん断縁、手動ガス切断縁		28	34	38	44
	圧延縁、自動ガス切断縁等		22	26	28	32

（）内はボルトが応力方向に３本以上並ばない場合を示す。



ゲージ g_2	千鳥打ちのピッチ b	
	M16, 20, 22	M24
35	50	65
40	45	60
55	25	45

3－3 形鋼のゲージ

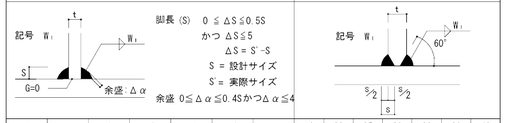


A or B	g_1	g_2	最大軸径	B	g_1	g_2	最大軸径	B	g_3	最大軸径
**50	30		16	**100	60		16	**50	30	16
60	35		16	125	75		16	65	35	20
65	35		20	150	90		22	70	40	20
70	40		20	175	105		22	75	40	22
75	40		22	200	120		24	80	45	22
80	45		22	250	150		24	90	50	24
90	50		24	*300	150	40	24	100	55	24
100	55		24	350	140	70	24			
125	50	35	24	400	140	90	24			
130	50	40	24							
150	55	55	24							
175	60	70	24							
200	60	90	24							

＊B ＝300は千鳥打ちとする。
＊＊印の欄のｇ及び最大軸径の値は強度上支障がないとき最小縁端距離の規定にかかわらず用いることができる。

§4 溶接接合

4－1 隅肉溶接



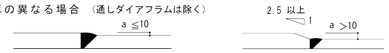
t	6 以下	9	12	14	16	19	22	25	28	32	36	40
s	t	7	9	10	12	11	13	15	17	19	21	24

断続隅肉溶接の長さL

L≧10S かつ 40 以上

4－2 完全溶込み溶接（突合せ溶接）

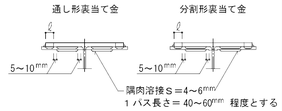
1) 板厚の異なる場合 （通しダイアフラムは除く）



クレーンガーダの場合は、全て2.5倍以上の勾配をとる。

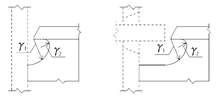
2) エンドタブ

両端に継手と同じ形状のエンドタブを取り付ける。
エンドタブの長さℓは25mm以上とする。
エンドタブを切断する場合溶接終了後母材より5～10mmはなして切断する。代替タブを採用する場合は溶接技量付加試験に合格した溶接工によること。
エンドタブ、裏当て金の組立て溶接は右図による。



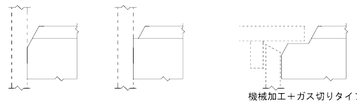
3) 開先加工 （下図は参考とする。）

a) スカラップ工法



- スカラップの円弧の曲線は、フランジに滑らかに接するように加工する。γ_1は 35 程度、γは 10 以上とする。なお複合円は滑らかに仕上げること。
- 完全溶込み溶接部以外のスカラップはγ=25程度とする。

b) ノンスカラップ工法



4) 開先形状

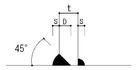
小文字は管理許容差（）は限界許容差を示す　※十分な品質管理を行う

記号	形状	適用板厚		寸法 アーク手溶接	寸法 ガスシールドまたはセルフシールドアーク溶接
W_2 MC-BL-1B GC-BL-1B	裏当て α1 R T 9 以上 25 以上 G	6～	G	9 +∞(+∞) −2(−3)	7 +∞(+∞) −2(−3)
			R	2 +1(+2) −2(−2)	2 +1(+2) −2(−2)
			α_1	35 +∞(+∞) −2.5°(−5°)	35 +∞(+∞) −2.5°(−5°)
W_3 MC-BL-2 GC-BL-2	裏はつり α1 R T G	6～	G		7 +∞(+∞) −1(−2)
			R		2 +2 −2
			α_1		30 +∞(+∞) −1°(−2°)
W_4 MC-BK-2 GC-BK-2	裏はつり α1 d1 R d2 T G α2	16～	G	0 +2.5(+4) −0(−0)	0 +2(+3) −0(−0)
			d_1	$\frac{2}{3}$(T−R)	$\frac{2}{3}$(T−R)
			R	2 +2(+3) −2(−2)	2 +2(+3) −2(−2)
			d_2	$\frac{1}{3}$(T−R)	$\frac{1}{3}$(T−R)
			α_1	45° +∞(+∞) −2.5°(−5°)	45° +∞(+∞) −2.5°(−5°)
			α_2	60° +∞(+∞) −2.5°(−5°)	60° +∞(+∞) −2.5°(−5°)
W_5 MC-BI-1B GC-BI-1B	裏当て T G FB-4.5×19	3～6	G	T +∞(+∞) −2(−2)	T +∞(+∞) −2(−3)

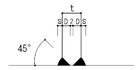
MC … はアーク手溶接　GC … はガスシールドアーク溶接・セルフシールドアーク溶接の記号を示す。

4－3 部分溶込み溶接

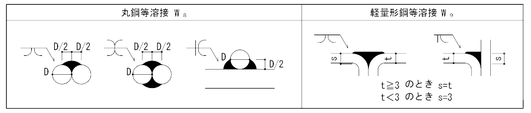
片面溶接 W_6									
12 ≦ t ≦ 40									
t	12	16	19	22	25	28	32	36	40
D	10	11	12	13	13	14	15	15	16
t/4 ≦ S ≦ 10									



両面溶接 W_7
16 ≦ t ≦ 40
D=(t−2)/2



4－4 フレア溶接

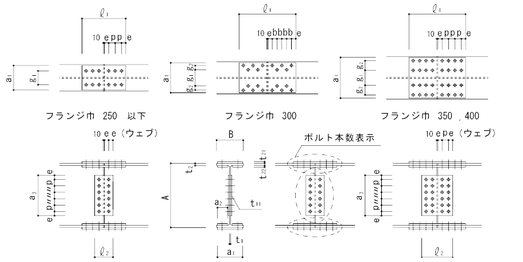


4－5 その他

加工工程中及び現場建方後においてもアークストライク、ショートビードをしてはならない。

§5 継手

5－1 継手リスト

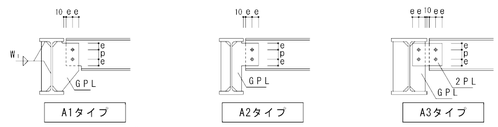


材種	主材	高力ボルト径	フランジ ボルト 総本数	フランジ 外側添板 2PL− t_{21} × a_1 × ℓ_1	フランジ 内側添板 4PL− t_{22} × a_2 × ℓ_1	ウェブ ボルト 総本数	ウェブ 添板 2PL− t_{11} × a_1 × ℓ_2	ピッチ
	H− A × B × t_1 × t_2			× ×	× ×		× ×	
	BH− A × B × t_1 × t_2			× ×	× ×		× ×	
	H− × × ×			× ×	× ×		× ×	
	H− × × ×			× ×	× ×		× ×	
	H− × × ×			× ×	× ×		× ×	
	H− × × ×			× ×	× ×		× ×	
	H− × × ×			× ×	× ×		× ×	
	H− × × ×			× ×	× ×		× ×	
	H− × × ×			× ×	× ×		× ×	
	H− × × ×			× ×	× ×		× ×	
	H− × × ×			× ×	× ×		× ×	
	H− × × ×			× ×	× ×		× ×	
	H− × × ×			× ×	× ×		× ×	
	H− × × ×			× ×	× ×		× ×	
	H− × × ×			× ×	× ×		× ×	

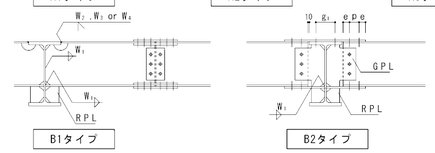
1．フランジPL面もしくはウェブPL面で、段差１mmを超える場合は、フィラーPLを入れて調整すること。
2．a_3は原則として梁成の2/3以上確保すること。

5－2 小梁仕口

ピン接合 Aタイプ



剛接合 Bタイプ



1．GPL, RPLは材種、版厚とも小梁のWPLと同等以上とする。
2．継手プレート及び高力ボルトはリストによる。

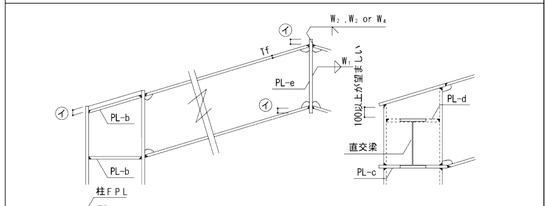
（販売元）一般社団法人日本建築構造設計事務所協会連合会　http://fasa-net.jp
（発行元）一般社団法人関西建築構造設計事務所協会　TEL(06)6763-8205　FAX(06)6763-8206　http：／／www. kse−web. com／　2025年2月1日作成
（不許複製）

工事名	天ケ瀬ダムかわまちづくり広場等整備工事（休憩施設等）	No. S-04
図面名	鉄骨工作標準図(1)	令和7年度
宇治市役所建設部施設建築課		

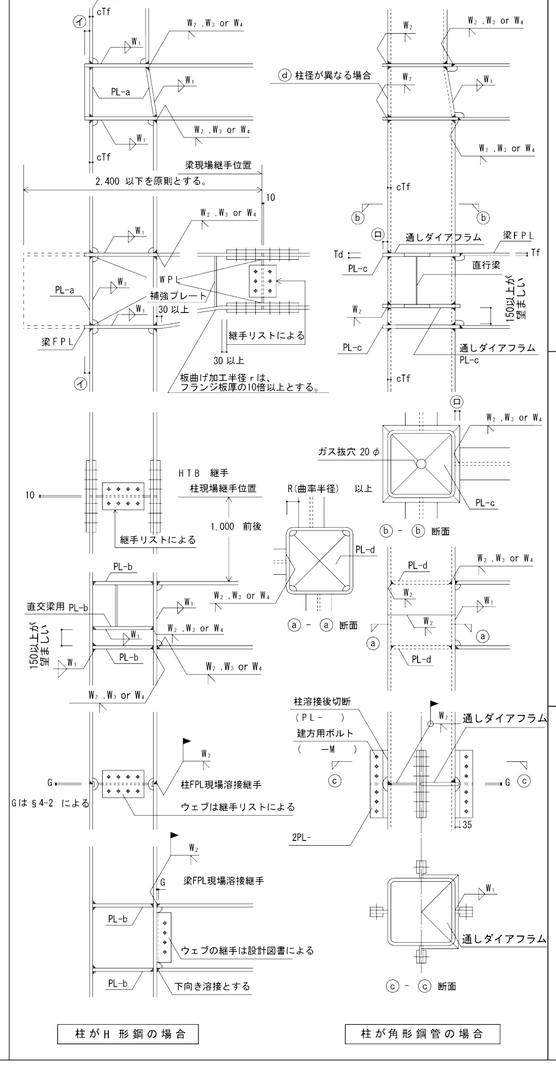
鉄 骨 工 作 標 準 図 (2) 2025年度版

§6 柱梁接合部及び継手

6－1 勾配屋根



6－2 梁通し

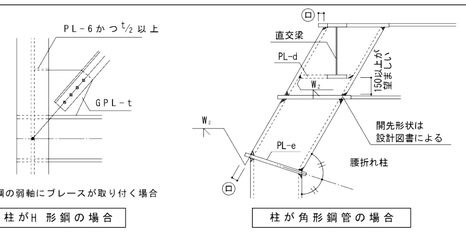


6－3 仕口と継手

6－4 柱通し

6－5 現場溶接継手

6－6 その他



1) パネルゾーンのPLの厚さ

1.	PL－a（鉛直スチフナ）	上下柱のFPLの厚い方より1サイズUP以上
2.	PL－b（水平スチフナ）	仕口部に集結する梁の最大FPLより1サイズUP以上
3.	PL－c（通しダイアフラム）	仕口部に集結する梁の最大FPLより2サイズUP以上かつ柱のFPL以上
4.	PL－d（内ダイアフラム）	仕口部に集結する梁の最大FPLより1～2サイズUP以上
5.	PL－e（折れ曲がり部）	梁（柱）のFPLより1サイズUP以上

2) 出寸法

ⓐ 25 ㎜ かつcTf以上

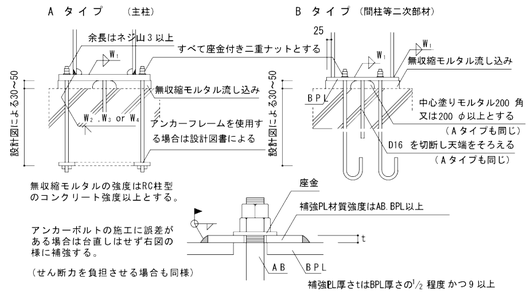
ⓑ cTf≦25の場合 25
cTf≧28の場合 30

3) 注記

1. ダイアフラムの材質は特記仕様書による。特記なき場合は、通しダイアフラムはSN490Cとし、内ダイアフラムはSN490Bとする。板厚が40mmを超える場合はTMCP鋼とする。
但し、架構にF値325を超える鋼材を使用する場合は設計図による。
2. ⓓ (6-2項) 上下階で柱径が異なる場合の板厚は上下階柱の厚い方、材質は上下階柱と同質以上とし、折り曲げ加工又は溶接加工とする。
3. ハンチ部でFPLを折曲げる場合はR≧10Tfとし補強プレートを入れる。ただし、勾配のゆるい場合（1／6程度）は不要。
4. ダイアフラムと梁フランジの溶接部は、梁フランジはダイアフラムの厚みの内部で溶接すること。（告示1464）
5. 現場溶接を行なう場合は工事監理者の承諾を得、養生に十分配慮して行うこと。

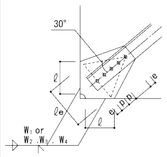
§7 柱 脚

7－1 一般柱脚



§8 壁面ブレース

8－1 ブレースリスト

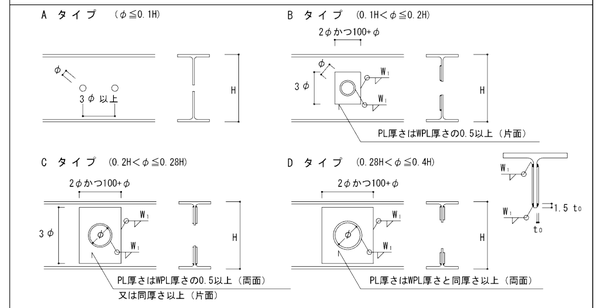


符号	部 材	高力ボルト		GPL		溶 接	
		径	本数	t	ℓe	脚長	Σℓ

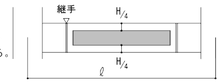
1. GPLの最小幅 ℓe が確保できない場合は、設計者の指示により板厚を変更する。
2. 丸鋼を使用する場合は、丸鋼、ターンバックル共ＪＩＳ規格適合品を使用する。
3. 床面ブレースは設計図書に明記なき場合は壁面に準ずる。

§9 その他

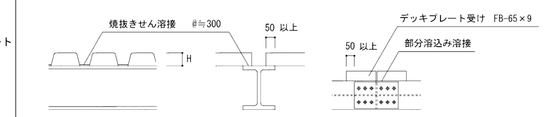
9－1 貫通補強



1. 既製品を用いた場合は評定内容による。
在来補強の場合、特記無き限り補強方法は上図によるが、孔径(φ)は0.5H以下とし、そのピッチは3.0φ以上とする。
(これを満足できない場合は設計者の指示による。)
2. 貫通孔を設ける範囲は右図の ▭ 部分を原則とする。

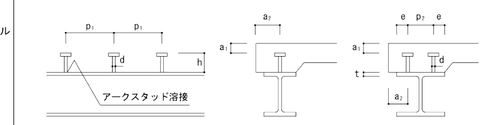


9－2 デッキプレート



◇ 合成スラブの場合はメーカー仕様による。

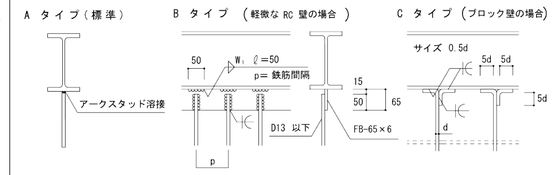
9－3 スタッドジベル



h	≧4.0d
7.5d	≦ p₁ ≦300
p₂	≧5.0d
a₁	≧40
a₂	≧100
e	≧40
d	≦2.5t

h, p₁, p₂ 設計図書による。

9－4 壁筋の溶接



工 事 名	天ケ瀬ダムかわまちづくり広場等整備工事（休憩施設等）	No. S-05
図 面 名	鉄骨工作標準図(2)	令和7年度
宇治市役所建設部施設建築課		

鉄 骨 工 作 標 準 図 (2) 2025年度版

§6 柱梁接合部及び継手

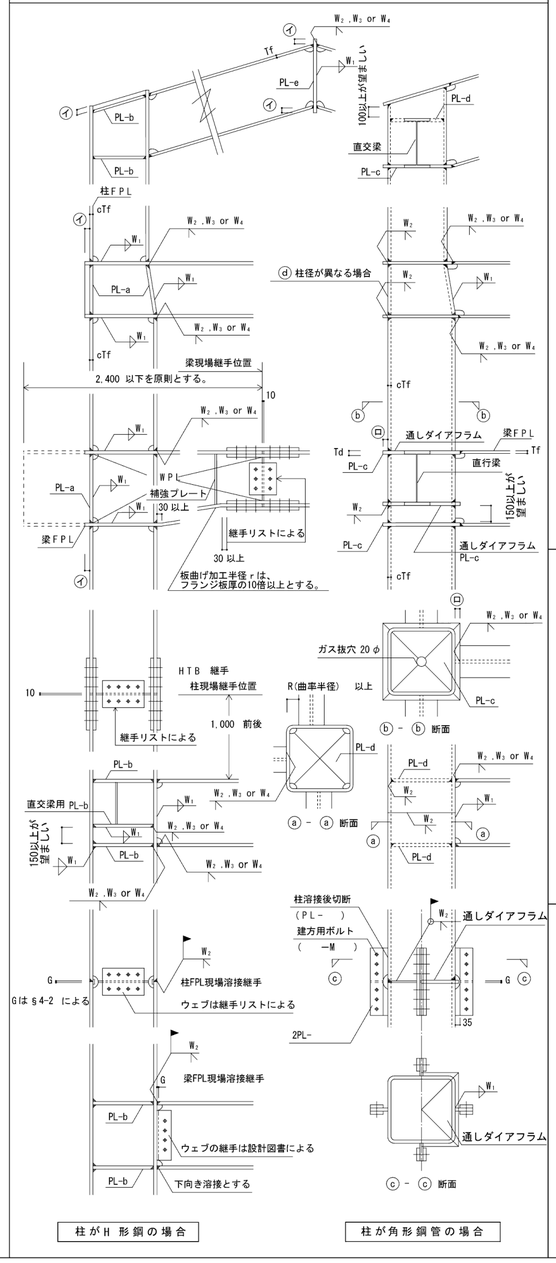
6－1 勾配屋根

6－2 梁 通 し

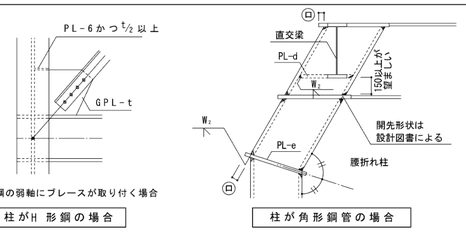
6－3 仕口と継手

6－4 柱 通 し

6－5 現場溶接継手



6－6 その他



1) パネルゾーンのPLの厚さ

1.	PL－a（鉛直スチフナ）	上下柱のFPLの厚い方より1サイズUP以上
2.	PL－b（水平スチフナ）	仕口部に集結する梁の最大FPLより1サイズUP以上
3.	PL－c（通しダイアフラム）	仕口部に集結する梁の最大FPLより2サイズUP以上かつ柱のFPL以上
4.	PL－d（内ダイアフラム）	仕口部に集結する梁の最大FPLより1～2サイズUP以上
5.	PL－e（折れ曲がり部）	梁（柱）のFPLより1サイズUP以上

2) 出寸法

ⓐ 25 ㎜ かつcTf以上

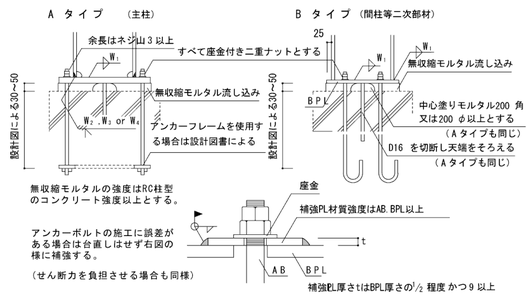
ⓑ cTf≦25の場合 25
cTf≧28の場合 30

3) 注記

1. ダイアフラムの材質は特記仕様書による。特記なき場合は、通しダイアフラムはSN490Cとし、内ダイアフラムはSN490Bとする。板厚が40㎜を超える場合はTMCP鋼とする。
但し、架構にF値325を超える鋼材を使用する場合は設計図による。
2. ⓓ (6-2項) 上下階で柱径が異なる場合の板厚は上下階柱の厚い方、材質は上下階柱と同質以上とし、折り曲げ加工又は溶接加工とする。
3. ハンチ部でFPLを折曲げる場合はR≧10Tfとし補強プレートを入れる。ただし、勾配のゆるい場合（1／6程度）は不要。
4. ダイアフラムと梁フランジの溶接部は、梁フランジはダイアフラムの厚みの内部で溶接すること。（告示1464）
5. 現場溶接を行なう場合は工事監理者の承諾を得、養生に十分配慮して行うこと。

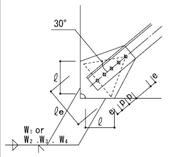
7－1 一般柱脚

§7 柱 脚



8－1 ブレースリスト

§8 壁面ブレース

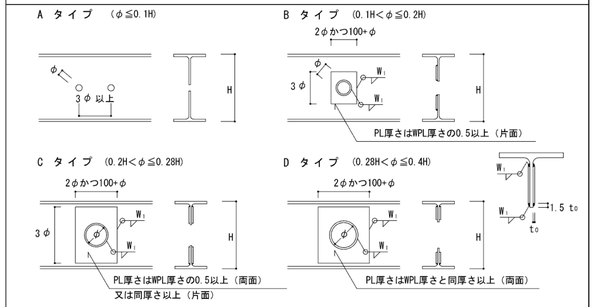


符号	部 材	高力ボルト		GPL		溶 接	
		径	本数	t	ℓe	脚長	Σℓ

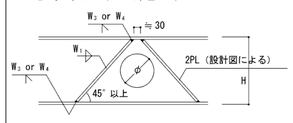
1. GPLの最小幅 ℓe が確保できない場合は、設計者の指示により板厚を変更する。
2. 丸鋼を使用する場合は、丸鋼、ターンバックル共ＪＩＳ規格適合品を使用する。
3. 床面ブレースは設計図書に明記なき場合は壁面に準ずる。

§9 その他

9－1 貫通補強

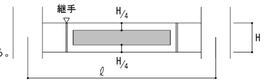


E タイプ (0.4H<φ≦0.5H)

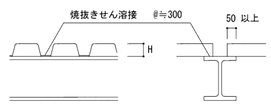


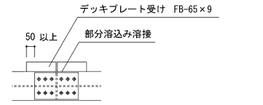
F タイプ

1. 既製品を用いた場合は評定内容による。
在来補強の場合、特記無き限り補強方法は上図によるが、孔径(φ)は0.5H以下とし、そのピッチは3.0φ以上とする。
(これを満足できない場合は設計者の指示による。)
2. 貫通孔を設ける範囲は右図の ▭ 部分を原則とする。



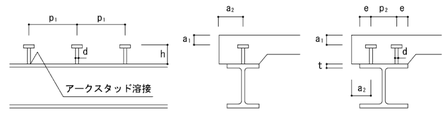
9－2 デッキプレート





○ 合成スラブの場合はメーカー仕様による。

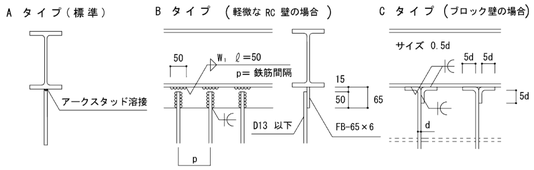
9－3 スタッドジベル



h ≧4.0d
7.5d ≦ p₁ ≦300
p₂ ≧5.0d
a₁ ≧40
a₂ ≧100
e ≧40
d ≦2.5t

h, p₁, p₂ 設計図書による。

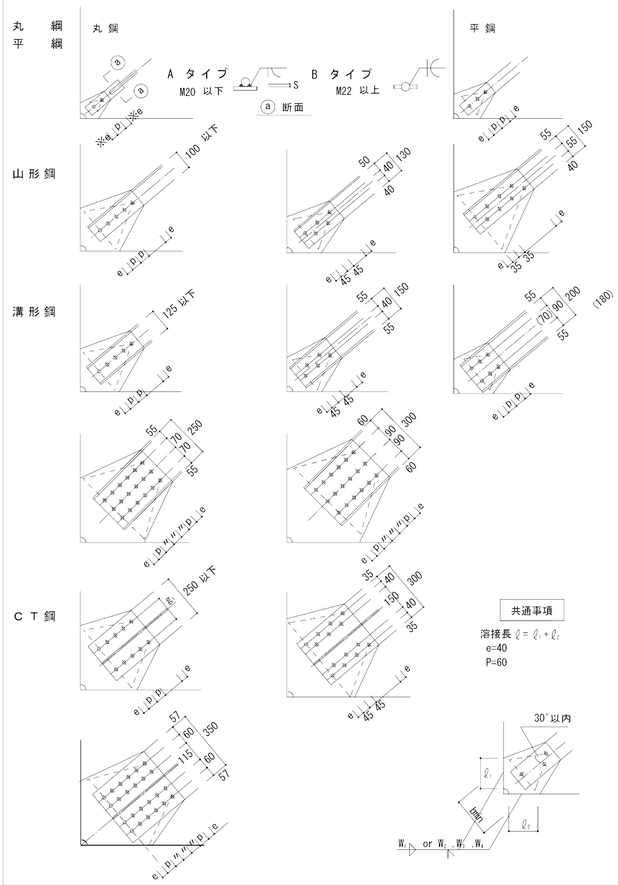
9－4 壁筋の溶接



工 事 名	天ケ瀬ダムかわまちづくり広場等整備工事（休憩施設等）	No. S-06
図 面 名	H形鋼継手標準図	令和7年度
宇治市役所建設部施設建築課		

ブ レ ー ス 仕 口 標 準 図 (1) 2025年度版
(鋼材４００N/mm^{2}級 ＨＴＢ Ｓ１０Ｔ，Ｆ１０Ｔ)

壁面ブレース （床面ブレースもこれに準ずる）



丸鋼 JIS A 5540:2008

採用	部材	引張耐力 (kN)	GPL-txb min	HTB	※e	溶接長 ℓ (mm)	溶接長 s (mm)
	M10	14	6x 60	1-M12	30	60	6
	M12	20	6x 60	1-M16	40	60	6
	M14	28	6x 60	1-M16	40	60	6
●	M16	38	9x 70	1-M16	45	80	8
	M18	47	9x 70	1-M20	50	80	8
	M20	60	9x 80	1-M20	50	90	8
	M22	74	12x80	1-M22	55	100	10
	M24	87	12x90	2-M20	50	100	10
	M27	112	12x90	2-M20	50	120	10
	M30	138	12x100	2-M22	55	140	10
	M33	170	12x110	2-M22	55	160	10

平鋼

採用	部材	引張耐力 (kN)	GPL-txb min	HTB	溶接長 ℓ (mm)	溶接長 s (mm)
	FB - 65x 6	66	6x 65	2-M16	90	6
	FB - 75x 6	80	6x 75	2-M16	100	6
	FB - 65x 9	99	9x 65	3-M16	110	7
	FB - 75x 9	120	9x 75	3-M16	120	7
	FB - 90x 9	143	9x 90	3-M20	140	7
	FB - 100x 9	165	9x100	3-M20	160	7
	FB - 90x12	191	12x 90	3-M20	160	9
	FB - 100x12	220	12x100	4-M20	170	9
	FB - 90x16	255	16x 90	4-M20	170	12
	FB - 100x16	293	16x100	5-M20	180	12
	FB - 125x12	290	12x125	5-M20	210	9
	FB - 125x16	387	16x125	6-M20	220	12

山形鋼 （2Lは2面せん断の場合とする。）

採用	部材	引張耐力 (kN)	GPL-txb min	HTB	溶接長 mm →	溶接長 mm ↖	組立 i
	L - 65x 65x 6	106	6x110 (9x 90)	5-M16	140 (130)		
	L - 75x 75x 6	127	6x130 (9x 95)	5-M16	160 (150)		
	L - 75x 75x 9	181	9x130	5-M16	200		
	L - 75x 75x12	233	9x160	5-M20	240		
	L - 90x 90x 7	177	9x130	5-M20	190		
	L - 90x 90x10	242	9x170	5-M20	250		
	L - 90x 90x13	306	9x200	6-M20	310		
	L - 100x100x 7	202	9x140	5-M20	220		
	L - 100x100x10	277	9x190	5-M20	290		
	L - 100x100x13	351	9x230	7-M20	360		
	L - 130x130x12	423	12x220	7-M22	340		
	L - 130x130x15	518	12x260	8-M22	410		
	L - 150x150x15	582	16x240	9-M22	360	190	
	L - 150x150x19	720	16x290	11-M22	440	240	
	2L - 65x 65x 6	303	9x170	5-M16	260		3.00
	2L - 75x 75x 6	359	9x190	5-M16	300		3.40
	2L - 75x 75x 9	503	9x270 (12x210)	5-M20	410 (340)		3.45 (3.56)
	2L - 75x 75x12	654	12x260	5-M20	420		3.64
	2L - 90x 90x 7	502	12x210	5-M20	330		4.12
	2L - 90x 90x10	695	12x270	5-M20	450		4.17
	2L - 90x 90x13	886	12x350	7-M20	560		4.24
	2L - 100x100x 7	567	12x230	5-M20	370		4.52
	2L - 100x100x10	789	12x310	6-M20	500		4.57
	2L - 100x100x13	1008	12x390	8-M20	630		4.64
	2L - 130x130x12	1216	16x360	8-M22	580	330	5.94
	2L - 130x130x15	1494	16x440	10-M22	710	400	6.01
	2L - 150x150x15	1698	19x450	11-M22	740	400	6.90
	2L - 150x150x19	2115	22x460	13-M22	850	420	7.11

溝形鋼

採用	部材	引張耐力 (kN)	GPL-txb min	HTB	溶接長 mm →	溶接長 mm ↖	組立 i
	[- 100x 50x 5 x 7.5	187	9x130	5-M20	180		
	[- 125x 65x 6 x 8	279	9x180	6-M20	310		
	[- 150x 75x6.5x10	345	9x240	7-M20	420		
	[- 180x 75x 7 x10.5	426	12x220	8-M20	370		
	[- 200x 80x7.5x11	499	12x260	10-M20	430		
	[- 200x 90x 8 x13.5	609	12x300	12-M20	520		
	[- 250x 90x 9 x13	685	16x280	12-M20	450	240	
	[- 300x 90x 9 x13	790	16x310	15-M20	490	270	
	2 [- 100x 50x 5 x 7.5	508	12x210	5-M20	320		
	2 [- 125x 65x 6 x 8	742	12x290	6-M20	470		3.20
	2 [- 150x 75x6.5x10	1022	16x310	8-M20	520	280	3.85
	2 [- 180x 75x 7 x10.5	1133	19x300	10-M20	490	260	3.83
	2 [- 200x 80x7.5x11	1317	19x340	12-M20	560	300	3.98
	2 [- 200x 90x 8 x13.5	1651	22x370	12-M20	610	320	4.73
	2 [- 250x 90x 9 x13	1792	22x415	15-M20	660	350	4.40
	2 [- 300x 90x 9 x13	2033	22x460	18-M20	730	390	4.21

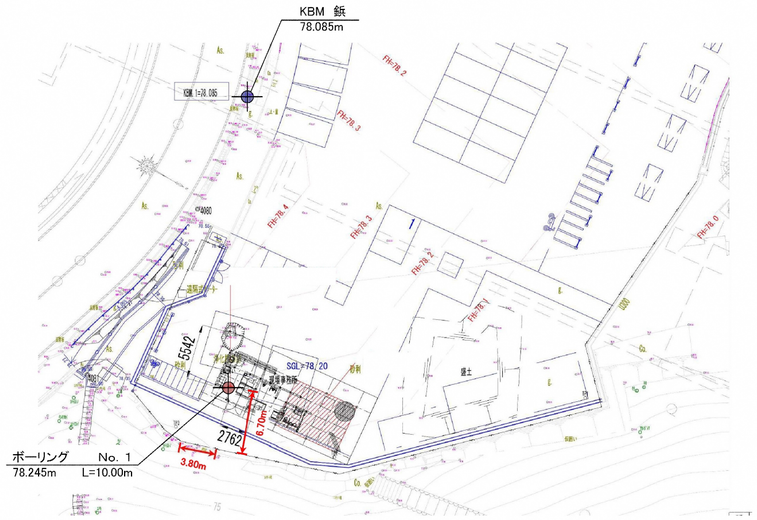
ＣＴ鋼

採用	部材	引張耐力 (kN)	GPL-txb min	HTB	溶接長 mm →	溶接長 mm ↖	組立 i
	CT- 75x150x 7 x10	319	9x210	8-M16	320		
	CT-87.5x175x7.5x11	413	12x210	8-M20	330		
	CT- 100x200x 8 x12	529	12x260	10-M20	400		
	CT- 125x250x 9 x14	797	16x280	12-M20	460	250	
	CT- 150x300x10 x15	1002	16x400	14-M20	580	300	
	CT- 175x350x12 x19	1380	19x450	20-M20	620	330	
	2CT-87.5x175x7.5x11	1094	16x350	8-M20	480	270	3.16
	2CT- 100x200x 8 x12	1369	16x420	10-M20	600	340	3.49
	2CT- 125x250x 9 x14	1695	19x460	12-M20	650	400	4.25

（販売元）一般社団法人日本建築構造設計事務所協会連合会 http://fasa-net.jp
（発行元）一般社団法人関西建築構造設計事務所協会 TEL(06)6763-8205 FAX(06)6763-8206 http：／／www. kse-web. com／ 2025年2月1日作成
（不許複製）

工事名	天ケ瀬ダムかわまちづくり広場等整備工事（休憩施設等）	No. S-07
図面名	ブレース仕口標準図	令和7年度
宇治市役所建設部施設建築課		

ボーリング柱状図



調査位置平面図

ボーリング位置図

共通事項 特記なき限り下記による

KBM=78.085
GL=78.30
GL=KBM+0.215

調査名 旧ガーデンズ天ケ瀬跡地整備詳細設計業務委託

ボーリングNo 3 6 1 2 0 3 5

事業・工事名

シートNo

ボーリング名	No.1	調査位置	京都府宇治市宇治金井戸 地内					北緯	34° 52' 50.22"
発注機関				調査期間	令和6年12月21日 ～ 6年12月21日			東経	135° 49' 29.60"
調査業者名	株式会社 リークス開発 電話 (0725-55-0123)	主任技師	尾崎 功一	現場代理人	松下 彰	コア鑑定者	松下 彰	ボーリング責任者	長尾 恭成
孔口標高	78.245m	角度	上 180° 下 0° 90°	方向	北 0° 西 270° 東 90° 南 180°	地盤勾配	水平 0° 鉛直 90°	使用機種	
総掘進長	10.00m								

試錐機	Do-D	ハンマー落下用具	自動落下装置
エンジン	TF120V-E	ポンプ	KANO V6C

標尺 (m)	標高 (m)	層厚 (m)	深度 (m)	柱状図	土質区分	色調	相対密度	相対稠度	記事
1					埋土（玉石混じり砂礫）	褐			角～亜角礫φ2～30mm程度主体 砂は中～粗砂 玉石φ100～200mm程度点在する コンクリート片混入する 含水比小位 GL-2.90mまで無水掘水位確認できず
2	75.35	2.90	2.90						
3	75.15	0.20	3.10		埋土（コンクリート）				鉄筋φ10mm程度混入する
	74.45	0.70	3.80		シルト質砂	黄褐	非常に緩い		砂は細砂主体 シルト分全般に混入する 含水比小位
4					泥質砂岩	黄褐			ベネ試料にて岩構造確認 全般に風化されGL-9.00m付近までシルト状及び砂状化している GL-9.00m付近より部分的に礫状化している
5									
6									
7									
8									
9									
10	68.25	6.20	10.00						

孔内水位(m)／測定月日

標準貫入試験

深度 (m)	10cmごとの打撃回数 0～10	10～20	20～30	打撃回数／貫入量(cm)
0.65	1	1		2/30
0.95	15	15		
1.45	1	1	1	3/30
2.15	1	2	1	4/30
2.45				
3.15	1	1	2	4/30
3.45				
4.15	9	10	11	30/30
4.45				
5.15	21	28	11/3	60/23
5.38				
6.15	34	26/7		60/17
6.32				
7.15	60/8			60/8
7.23				
8.15	28	32/8		60/18
8.33				
9.00	60/4			60/4
9.04				
10.00	貫入不能			60/0
10.00				

N値 0 10 20 30 40 50 60

原位置試験

深度 (m)	試験名および結果

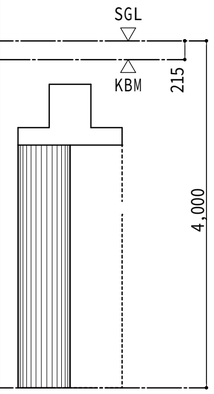
試料採取

深度 (m)	試料番号	採取方法

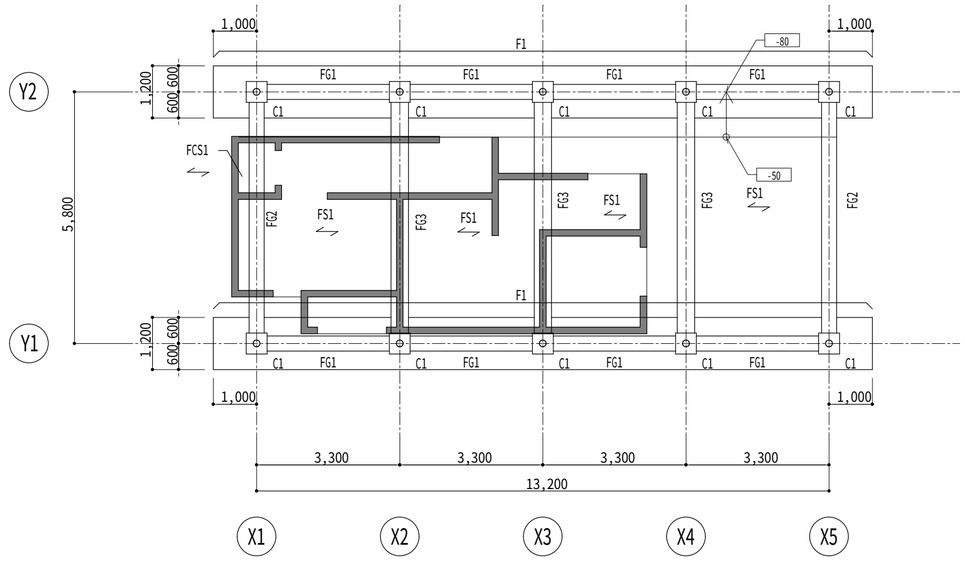
室内試験（ ）

掘進月日

12/21



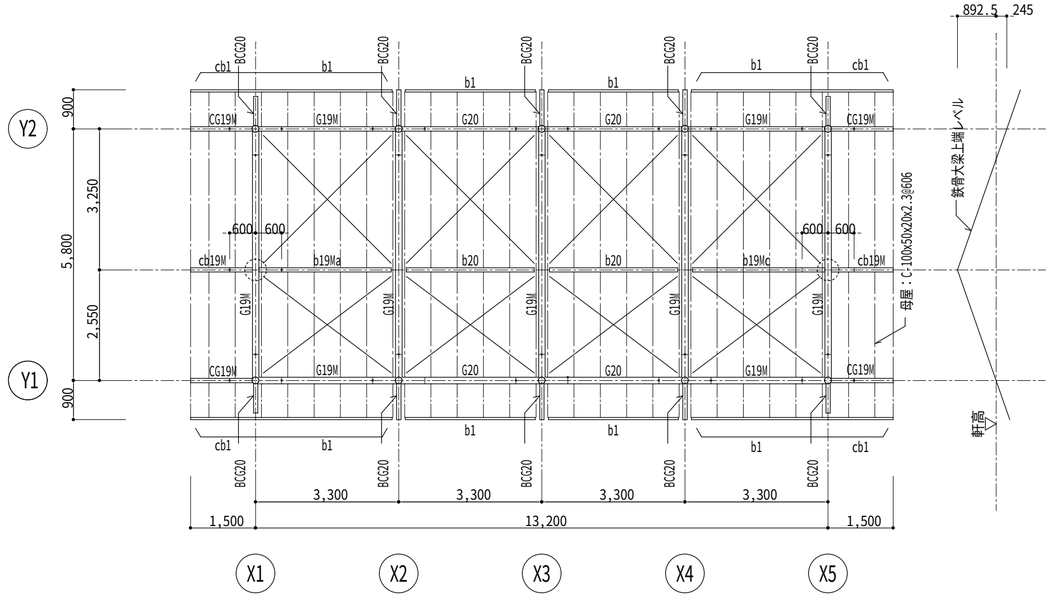
工事名	天ケ瀬ダムかわまちづくり広場等整備工事（休憩施設等）	No.	S-08
図面名	ボーリング柱状図	令和7年度	
宇治市役所建設部施設建築課			



基礎・1階床伏図　1/100

共通事項 特記なき限り下記による

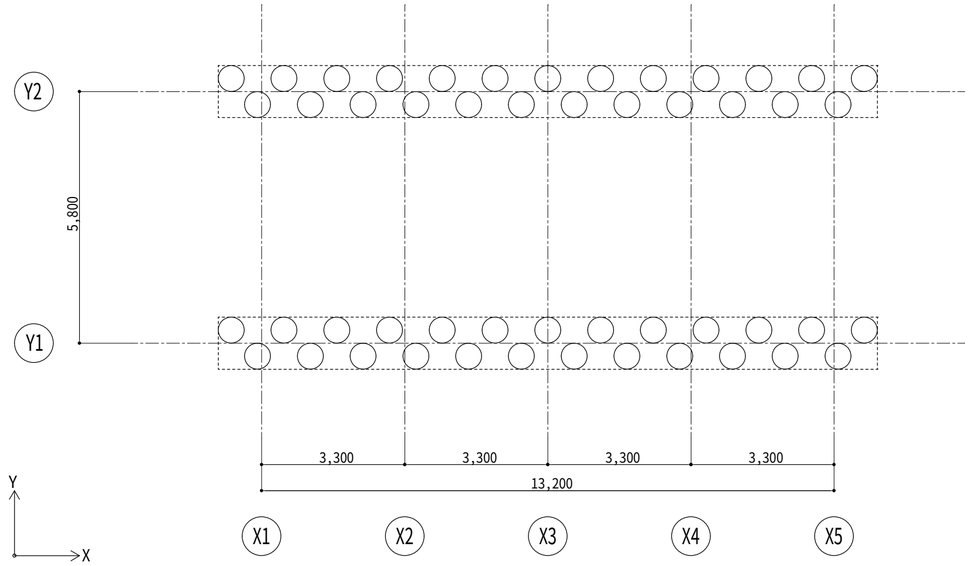
- -00 はSGLからのスラブ天端を示す。
- 基礎梁天端は、SGL-500とする。
- 基礎下端は、SGL-1,200とする。
- ⇐は、主筋方向を示す。
- 立上り部は、木部基礎伏図を参照すること。



屋根伏図　1/100

共通事項 特記なき限り下記による

- 屋根ブレースはX1とする。
- 鉄骨梁天端は、屋根勾配により決定する。
- 鉄骨現場継手位置は柱芯より600とする。
- ＋ 表示は鉄骨継手を示す。
- ◯ 表示は剛接合を示す。

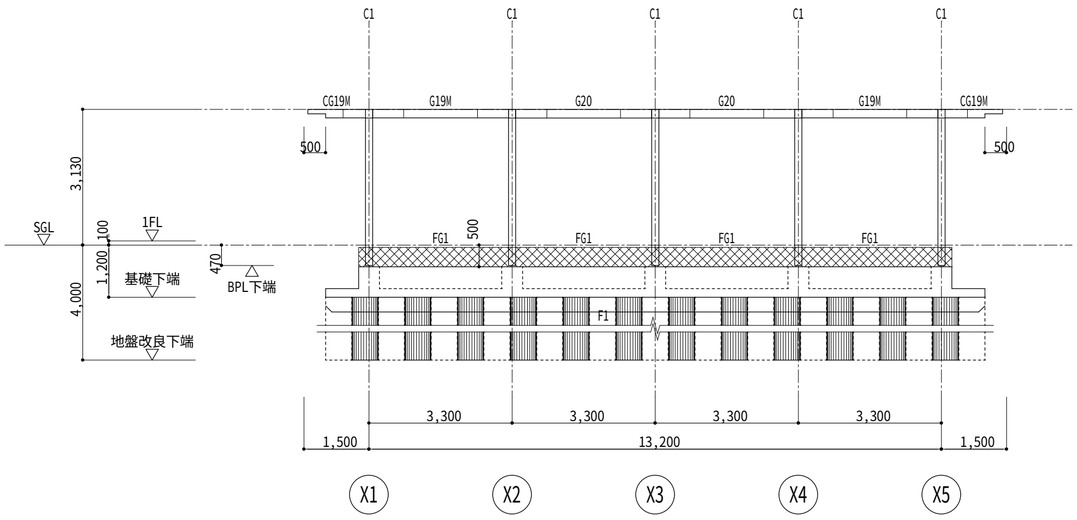


地盤改良伏図　1/100

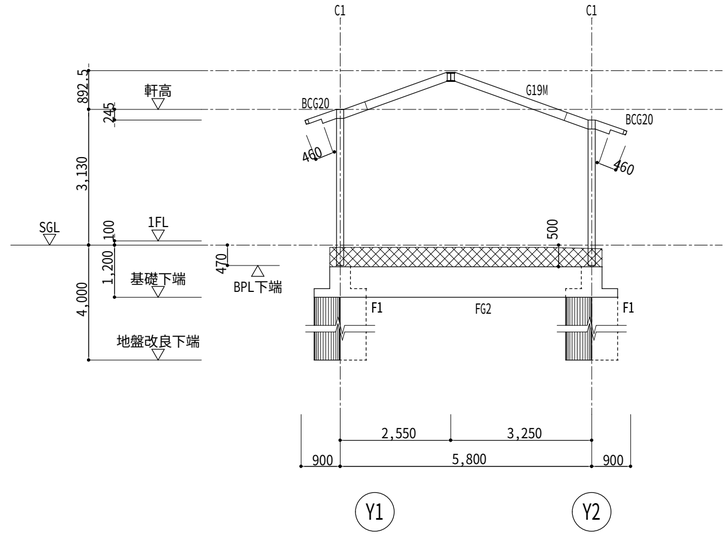
共通事項 特記なき限り下記による

- 基礎下は、地盤改良（湿式柱状改良工法）とする。
- ◯ は、地盤改良：柱状改良コラム（600φ　50本）を示す。
- 基礎下端は、SGL-1,200とする。
- 地盤改良下端は、SGL-4,000とする。
- 設計基準強度：Fc=800kN/m^2
- 改良施工に際し地中埋設物を確認すること。必要な場合良質土に置き換えること。
- 「建築物のたもの改良地盤の設計及び品質管理指針」(日本建築センター)に
  したがって事前に施工計画書を提出すること。

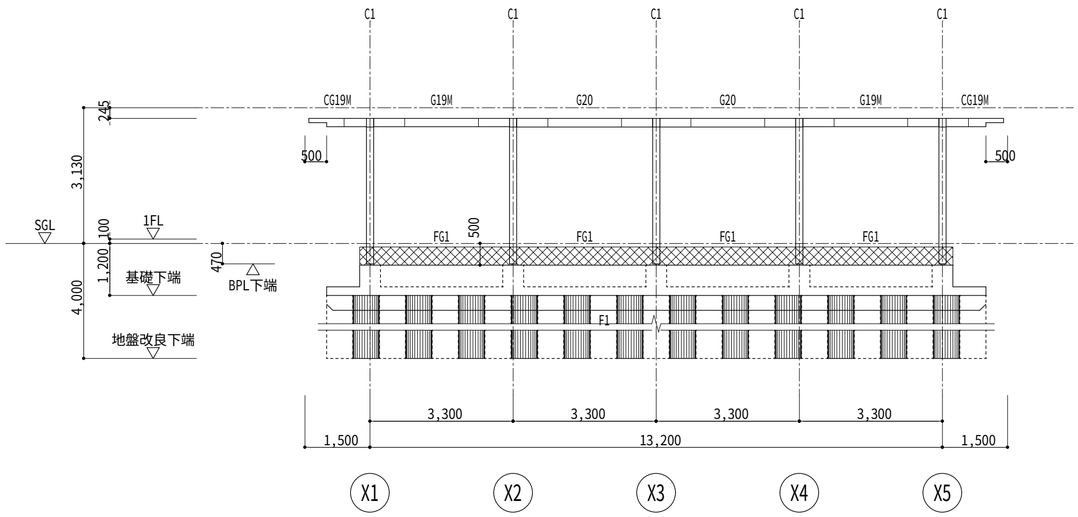
工　事　名	天ケ瀬ダムかわまちづくり広場等整備工事（休憩施設等）	No.　S-09
図　面　名	伏　図	令和7年度
宇 治 市 役 所 建 設 部 施 設 建 築 課		



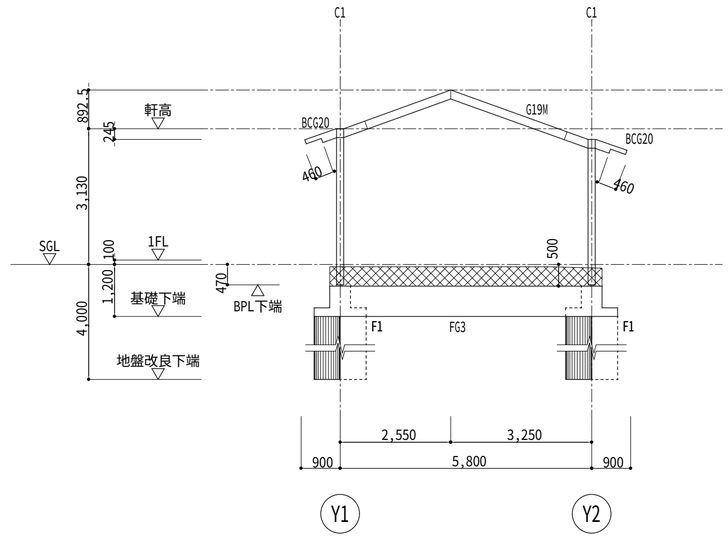
Y1 通り軸組図 1/100



X1 , X5 通り軸組図 1/100



Y2 通り軸組図 1/100



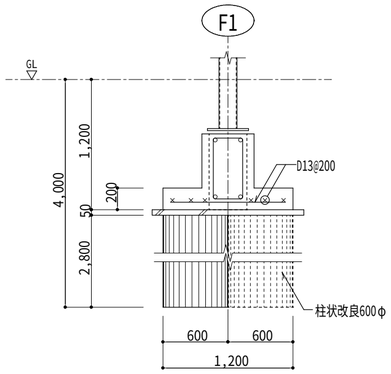
X2 ～ X4 通り軸組図 1/100

共通事項 特記なき限り下記による

- 基礎梁天端は、SGL-500とする。
- 鉄骨現場継手位置は柱芯より600、
  跳ね出し梁継手位置は柱芯より600とする。
- ▨ は梁上増し打ちを示す。
- 梁上増打ち　t≦500は S-03標準図8-3増し打ち補強の200＜ｔ≦300に準じる。

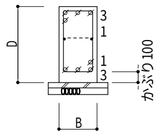
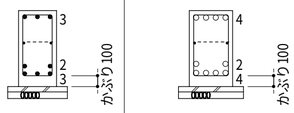
工　事　名	天ケ瀬ダムかわまちづくり広場等整備工事（休憩施設等）	No. S-10
図　面　名	軸組図	令和7年度
宇治市役所建設部施設建築課		

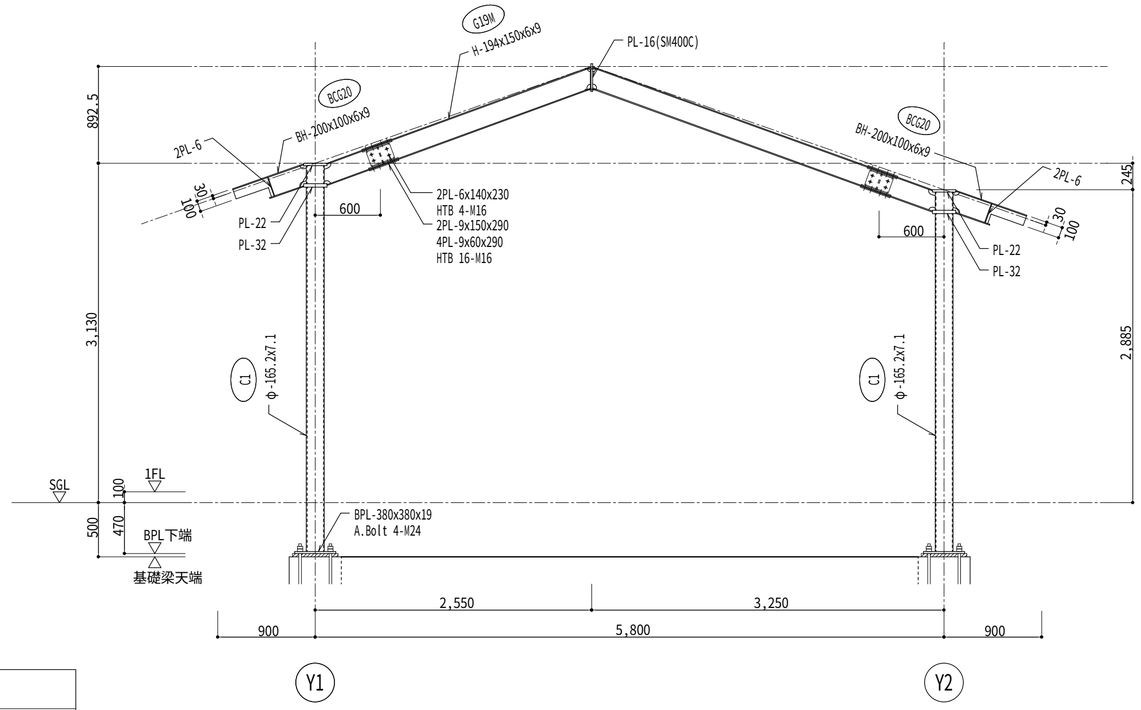
基礎リスト 1/40



基礎梁リスト 1/40

共通事項（特記なき限り）
- 幅止筋は、D10@1,000以内とする。

符　号	FG1	FG2	FG3
位　置	全断面	全断面	全断面
断　面			
BxD	350x700	350x700	400x700
上端筋	4-D16	3-D19	4-D22
下端筋	4-D16	5-D19	6-D22
スターラップ	□-D13@200	□-D13@200	□-D13@200
腹　筋	2-D10	2-D10	2-D10
備　考			

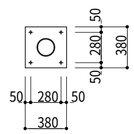
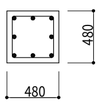


(X2) 通り架構詳細図 1/40

共通事項（特記なき限り）
- 通しダイアフラムPLは、SM400Cとする。

柱リスト 1/40

共通事項（特記なき限り）
- 使用鋼材は、SS400とする。

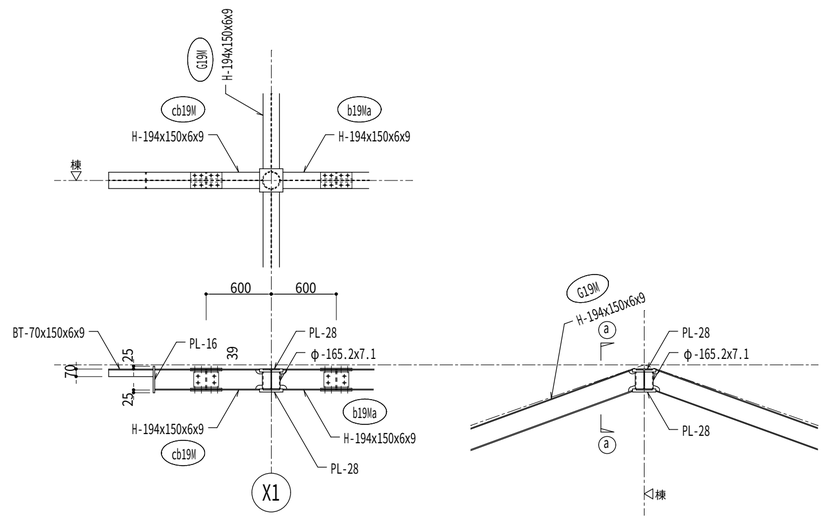
符　号	C1
部　材	φ-165.2x7.1(STK400)
柱　脚	
BPL	PL-19x380x380
A.Bolt	4-M24(L=480,フック付ダブルナット)
柱　型	
Dx×Dy	480x480
主　筋	8-D19
帯　筋	□-D13@100

部材リスト 1/40

共通事項（特記なき限り）
- 使用鋼材は、SS400とする。
- HTBは、S10Tとする。

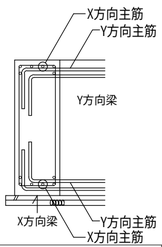
符　号	部　材	備　考
G19M	H-194x150x6x9	
G20	H-200x100x5.5x8	
BCG20	BH-200x100x6x9	詳細図参照
cb19M	H-194x150x6x9	先端は詳細図参照
b20	H-200x100x5.5x8	GPL-6,　HTB 2-M16
b19Ma b19Mc	H-194x150x6x9	GPL-6,　HTB 2-M16 b19Ma：左端剛接合，b19Mc：右端剛接合
b1,cb1	[-100x50x5x7.5	GPL-6,　中ボルト 2-M16
X1	1-M16(ターンバックル締め)	GPL-9,　HTB 1-M16
母屋	C-100x50x20x2.3	GPL-6,　中ボルト 1-M16

棟部取付き詳細図 1/40



床版リスト

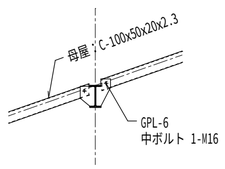
符　号	版　厚	位　置	主筋方向	配力筋方向	備　考
FS1 FCS1	200	上端筋	D13@200	D13@200	
		下端筋	D10・D13@200	D10・D13@200	



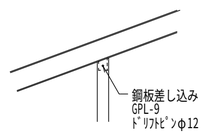
XY方向基礎梁主筋位置

特記なき限り下記による。
1. 直交する梁天端レベルが同一の場合は、Y方向梁の主筋を下、X方向梁の主筋を上に配置する。

母屋取付き詳細図 1/40



木取付き詳細図 1/40



鉄骨大梁と木柱・束接合部を示す。

工　事　名	天ケ瀬ダムかわまちづくり広場等整備工事（休憩施設等）	No.	S-11
図　面　名	部材リスト，架構詳細図	令和7年度	
宇治市役所建設部施設建築課			

ウルトラコラム工法　特記仕様書(小規模建築物)

§1工法概要

本地業は、ウルトラコラム工法による、地盤改良地業であり、スラリー状のセメント系固化材を地中に注入しながら、ウルトラコラム専用共回り防止翼(十字型)を装置した攪拌装置を用いて、原地盤を機械的に混合攪拌し、固化材の化学反応により所要の強度を持つ改良体を築造する工法である。

§2特記事項

本工事工法は、攪拌能力・攪拌径・品質(変動係数)に対して「建築技術性能認証委員会」にて証明された技術性能証明取得工法とする。
また、事前にその証明書を管理者に提出し認証を得ることとする。

§3一般事項

・本地業は、本特記仕様書によるほか、
「2018年版　建築物のための改良地盤の設計及び品質管理指針」
(2018年11月30日　一般財団法人　日本建築センター、以下指針という)による

<1>施工業者
本工事の施工業者は、地盤改良工法の施工技術及び計測装置の取り扱いに精通したもので、ウルトラコラム工法協会に所属する指定施工会社とする。

<2>設計変更
コラム径、掘削深度(改良長+空堀長)、本数配置等は、設計図書による。
ただし、コラムの径・長さ・本数・位置及びセメントスラリーの配合等について土質や地盤状況により変更した方が適切と判断される場合は、監督員の承認の上変更することができる。

§4コラム仕様

<1>設計基準強度
コラムの設計基準強度はFc=　800　kN/㎡とする。

<2>固化材
本工法を小規模建築物に適用する場合は、固化材添加量300ｋｇ/m^3
水固化材比60%～80%を標準とする。

土　　質	固化材種類
砂質土	六価クロム低減型
粘性土	六価クロム低減型
有機質土	高有機質土質用
シラス	六価クロム低減型

※室内配合試験時に、六価クロム溶出試験を行い、溶出量が基準値を超えない事を確認する。
試験方法は告示46号方式とする。

<3>固化材の配合設計

①設計基準強度Fc=800kN/㎡に対する配合設計
割増係数は指針より変動係数25%・抜き取りヶ所数3ヶ所とし、1.815（αt）を使用する。
配合強度Xfは次式により算出する。

Xf=αt×Fc　　＝ 1.815 × 800 ＝1452

②室内配合強度設計
設計基準強度×割増係数 / （現場室内強度比） / （室内28日・室内7日強度比）＝推定室内7日強度

Xl=Xf/αft　（αft=0.7）　αft：現場室内強度比
＝1452 / 0.7 = 2075kN/㎡　（室内配合4週強度）
Xl7=Xl/αft7d　（αft7d=1.41）　αft7d：室内28日・7日強度比
＝2075 / 1.41 = 1472kN/㎡　（室内配合1週強度）

固化材添加量	300	ｋｇ/m^3
水/固化材比	70	%

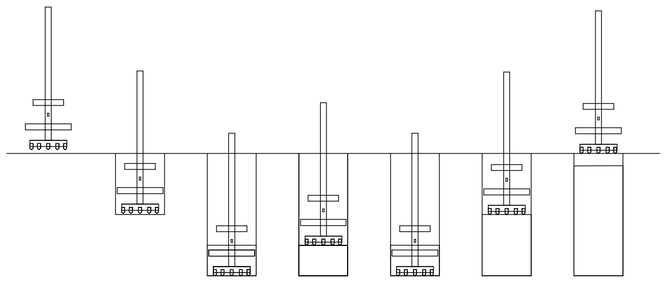
※上記を基準とし、貧配合・富配合の事前配合試験を実施し配合量を決定する。

§5施工監理

※施工手順に従って次の仕様で行う。
①固化材スラリーの吐出量
②ロッドの鉛直性
③オーガー回転数
④掘削深度・速度及び引上げ深度・速度
⑤トルク値またはオーガー電流値
⑥施工サイクルは1サイクル施工とする。

施工サイクル	貫入速度(m/分)	引抜き速度(m/分)
1サイクル	1.0m以下	1.0m以下

※先端処理時は1.0m/分以下



①ｺﾗﾑ芯ｾｯﾄ　②掘削・吐出・攪拌　③先端処理　④引上げ・攪拌完了

§6品質管理

小規模建築物では、コラム打設から基礎スラブ築造までの期間が短いため、材齢７日でのモールドコアの一軸圧縮強さによる品質検査を基本として採用する。

<1>調査箇所(検査対象層に対して)

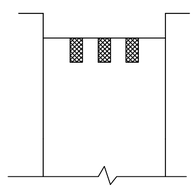
	設計対象層が頭部		設計対象層が深部
	改良長がL≦3mかつ、改良対象層が単一層	改良長がL≧3mかつ、改良対象層が複数層	
頭部モールドコア	3箇所以上　(1箇所あたり3供試体)		
深部モールドコア	――――――	1箇所以上　(3供試体)	

<2>調査ヶ所数(検査対象層に対して)

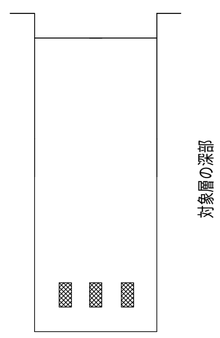
頭部モールドコア試験	3	箇所以上
深部モールドコア試験	1	箇所以上

<3>採取位置

頭部モールドコア



深部モールドコア



<4>合否の判定

①設計対象層について抜取ヶ所をNとする。１箇所あたり３個の供試体を採取し、強度をその箇所の強度とする。

②一軸圧縮試験は第三者で行うものとする。

③検査手法Aによる品質検査
合否の判定は設計対象層におけるNヶ所(抜取ヶ所数)の一軸圧縮試験結果が、下式を満足する場合を合格と判定する。

$X_N \geqq X_L = F_C + K_a \cdot \sigma d = F_C + K_a \ F_C \cdot Vd / (1-1.3Vd)$

X_N：　Nヶ所の一軸圧縮強度の平均値
X_L：　合格判定値
F_C：　設計基準強度
K_a：　合格判定係数
σd：　標準偏差
Vd：　変動係数、品質確認書より想定する。　(砂質土：0.25)

X_L	1275	kN/m^2

(合格判定係数)

採取ヶ所数　N	1	2	3	4～6	7～8	9～
合格判定係数　ka	1.9	1.7	1.6	1.5	1.4	1.3

<5>未固化改良体の比低抗測定

小規模建築物では、試験施工(1本目の施工)のコラムについて、必ずこれを実施し、安定した混合攪拌が確保できていることを確認する。
検査数量は、1検査対象群毎に1箇所以上かつ、50コラム毎に1箇所以上とする。
※なお、高有機土用固化材などで強度発現の早い固化材を用いる場合で、施工直後でも貫入が不可能な場合は、これを省略してもよい。

比低抗測定	1	箇所

GBRC　性能証明　第08－06号
ウルトラコラム工法　同等工法とすること。

工　事　名	天ケ瀬ダムかわまちづくり広場等整備工事（休憩施設等）	No.　S-12
図　面　名	地盤改良　標準図	令和7年度
宇治市役所建設部施設建築課		